

45号

# 愛鳥教育

1994.10



全国愛鳥教育研究会



秦野市立北小学校5年 高橋由香

# 愛鳥教育 No.45 1994.10

## 目次

巻頭言	江袋鳥吉	3
冬季研修会報告	平田寛重	4
	杉田優児	
	鳥田利子	
実践報告		
鳥から始める環境教育・		
鳥につなげる環境教育	植原 彰	9
愛鳥教育ing	田中 忠	14
野鳥の観察を通して		
自然の神秘を探る	岸本 勉	18
地域の環境に根づいた自然教育	大嶋茂子	20
自然体験活動の一貫としての		
自然教育	鈴木哲夫	22
都会のオアシス帷子川	松下希一	24

実践講座		
街中の校庭でもできる		
面白い自然観察ビンゴ	平田寛重	25
ぬり絵		30
冬期研修会のご案内		31
論説	平田寛重	32
事務局からのお知らせ		34
編集後記		34
愛鳥クイズ		35

## 巻頭言

# “きじっ子の森”で学んだ研修会

会長 江袋 島吉

平成5年度の冬期研修会は、前号既報のように11月22日（月）に、愛知県蒲郡市の西浦小学校を会場として行われた。

本研究会は民間の任意団体、しかも文部省とは違って、環境庁の系列にあるため、平日に公立学校を会場としたり、公開授業を実施することなどは考えられないことであったが、今回図らずも理想的な形で挙行をみたことは望外の喜びである。

これもひとえに、鈴木一夫校長先生の深いご理解から生まれたご英断と数々のご配慮、諸先生方のご厚情によるものと、改めて感謝を申し上げる次第である。

当日は、昨日来の雨も上がって秋晴れの好天気、山すその学校に到着すると、天空高く数羽のトビが飛び交い「ピーヒョロロ」と歓迎のメッセージを送っていて、“きじっ子の森”と共に牧歌調豊かなたずまいを見せている。

研修会はまず、集会活動“きじっ子タイム”の明るく楽しい発表（県代表として12月の全国野生生物

保護実績発表中央大会事前発表）に始まり、次いで“学校林・きじっ子の森”に設けた三つの青空教室で、本校独自の野外授業が公開される。

午後は、講師の国松俊英先生（児童文学者）から、絶滅したトキを中心とした野鳥愛護のお話を拝聴して、一同感懐を新たにす。

最後に、“愛鳥教育の進め方”をテーマに懇談会を持ち、遠来の山形・東京・滋賀・岐阜を始め、多数の方々による活発な意見の交換が行われた。

以上で全日程を終了したが、うらやましい程に恵まれた自然環境の中で、展開された特有の活動と内容には、ただ感嘆と敬服の念があるのみだった。しかも、これらが肩を張ることなくさりげなく行われている様子には、しっかりと地についている姿が伺われてなおさらだった。

快い興奮を胸に、朝同様「ピーヒョロロ」と別れを告げる？トビの声に送られて校門を辞する。

帰路に案内された養魚場のホシハジロの大群も研修会と共に忘れ得ぬ思い出の一つとなった。

## 惨！野鳥のピンチ・全国でテグス公害 ～ 環境教育の周辺

### ◇ 死の釣り糸の恐怖！日本鳥類保護連盟が調査

日本鳥類保護連盟は、一部のマナーの悪い釣り人によって放置されたテグスの被害から野鳥を守るため、昭和56年(1981)から、テグス・クリーンキャンペーンを実施してきたが、昨年の7月～9月に、全国の自治体や環境保護団体を通じて、359か所の海岸、湖沼、河口（総延長約142km）で、テグスの回収調査を行った。

その結果、40都道府県の271か所から、総延長で東京～熱海の距離を越える約115kmのテグスが見つかった。海岸、湖沼、河口の順に多く、くちばしに絡んだり、えさと誤って飲み込むなどして死んだ水鳥が39羽見つかっている。

また、釣り人50人のうち4割近い17人が、使用後のテグスを放置していた旨を答えている。

これまで確認した野鳥の死がいは178羽（うち28%は渡り鳥）にのぼり、同連盟では改めてマナーの向上を訴える一方、メーカーにも取扱いを明記したステッカーを作るように要望をした。

### ◇ 野鳥の被害を防ぐ釣り糸の開発

一方、このようなテグスの被害から、野鳥を守ろうという各種の試みがなされている。

その一例は、生分解性プラスチックを使った釣り糸の開発（D精工KK）で、淡水、海水、土の中を問わず、地球上に充満している微生物（バクテリア）によって、完全に分解される性質を持つ。1か月ほどで強度の低下が始まり、1年半か2年で自然に消滅、分解後は炭酸ガスと水とになって自然界に戻るので、極めて効果的である。

また、空気中での繁殖が困難なバクテリアの性質上、極端に湿気の多い場所以外は分解の恐れが無く、雨水に対してもすぐに溶ける心配が無い。

使用後濡れた場合は、ナイロン製の物と同様に、水洗いをするか乾燥した場所におけば良い。

本製品は目下試作の段階を経て、強度と分解力の増強、品質の安定性とコストの面など、技術上・量産上の問題点と取り組んでいるが、一日も早い市販、普及をマナーの向上とともに望んでやまない。（野村週報より）

## 平成5年度冬期研修会報告

1993年11月22日（月）、愛知県蒲郡市立西浦小学校において、今年度の冬期研修会を開催した。当研修会は、本会始まって以来の、学校にお邪魔して、授業を参観し、懇談会を通して研修を深めるという願ってもない内容であった。

西浦小学校は、昨年11月に「ねばり強く考え 自ら学ぶ子の育成 ー身近な自然環境を活かした学習活動を通してー」という研究主題で、生活科と理科を中心に研究発表を行い、今回その実践の成果を十二分に参観することができた。以下に、当日のプログラムを紹介する。

- 10:00 開会（会議室） ・会長挨拶  
・研修案内
- 10:25-10:45 自然愛護集会  
『きじっ子タイム』（体育館）
- 10:55-11:35 国松俊英氏のお話  
「滅びゆく鳥ートキー」（視聴覚室）  
4年生以上 3校時
- 11:45-12:30 公開授業  
『きじっ子の森を生かした授業』4校時  
生活科（2年2組）野沢先生 第2青空教室  
理科（6年2組）小林先生 第1青空教室  
学級裁量（4年1組）都築先生 第3青空教室
- 14:00-14:55 懇談会（会議室）  
「学校林や地域の自然環境を生かした愛鳥教育」



西浦小のシンボルバードとも言えるトビ。『きじっ子の森』の裏山に数百羽が住み着いている。定時に餌をまくと、たくさん群れて集まる。

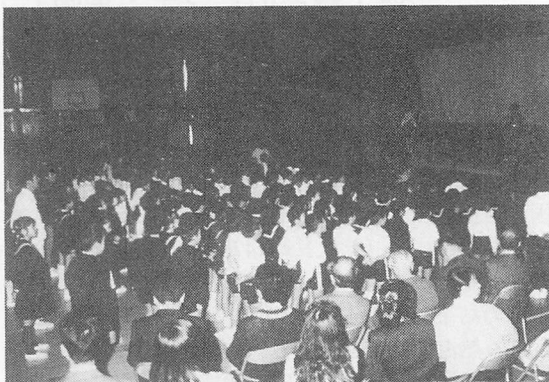
蒲郡市は、西浦半島の西端に位置し、三河湾に臨む漁港の町として栄えている。また、半島の先に西浦温泉があり、観光地としても知られている。

西浦小学校は、全校16クラスの中規模校であるが、地域の自然環境を学習活動に活かし愛鳥教育に取り組んでいる。その成果は、8月に行われた愛知県野生生物保護実績発表大会において第一席に輝き、愛知県代表として全国大会においても優秀な成績を修めている。

### 1. 自然愛護集会について

自然愛護集会は、各学期に1回、全校児童が集い、きじっ子タイム（毎週火曜日から土曜日の2限と3限の業間25分間に設けられている時間で、体力作りやファミリー（縦割）活動と共に月に1～2週を自然タイムとして自然に親しむ活動を行ってきている）や理科の時間に学習したことやネイチャークラブや愛鳥自然観察部の活動などの発表を行っているものである。

この活動を通して、自然愛護についての共通理解を深め、自信を持たせるとともに、子どもたちの意欲をさらに喚起するようにしている。



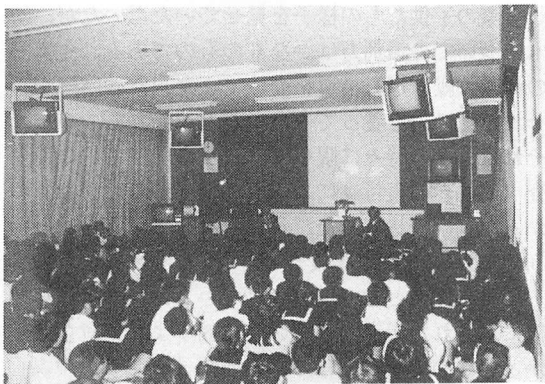
今回は、急遽、野生生物保護実績大会の全国大会に向けてのリハーサルを兼ねて、西浦小学校の愛鳥活動について、自然愛護委員会の児童によって発表された。

司会進行も児童が担当し、クイズあり、歌あり、演出も工夫されていて、見ていても大変楽しい内容であった。替え歌による学校林「きじっ子の森」の歌もあって、集会の最後に全員で元気よく歌われていた。

《常務理事 平田寛重》

## 2. 講演について

児童文学者の国松俊英先生に、「滅びゆく鳥—トキ—」と題して、ご講演をお願いした。西浦小学校の4年生以上の児童全員を対象にさせていただいたが、これは、私たち大人の参加者にとっても興味のあるテーマである。スライドを上映しながら、わかりやすくお話していただいた。



### 《お話のあらまし》

私は、11月3日に佐渡のトキ保護センターに行ってきました。そこでは、日本の最後の2羽のトキが飼育されています。今まで山の中にあった保護センターが古くなったので、今度新しく里に保護センターがつくられ、2羽のトキも移されました。それで、それを見せてもらいに行ったのです。

2羽のトキの1羽は、雌で、名前を「キン」といい、人間で言えば75～80歳くらい、もう1羽のトキは雄で、名前を「ミドリ」といい、65～70歳くらいと言われています。

日本のトキは、今はもうたった2羽になってしまいましたが、江戸時代には日本中にたくさんいたそうです。たんぼを荒らす悪い鳥と言われるくらいだったそうです。

明治時代になって、狩猟が行われるようになると、羽がきれいなので、その羽をとるために乱獲されました。その他、羽毛を羽根ふとんにしたり、くちばしを物かけにしたり、その肉を食べたりするためにも捕られたそうです。それで、昭和の初めには、日本中で60～100羽しかなくなってしまいました。そして、農薬などが使われるようになると、さらにその数は減っていきました。

人間が、干潟を埋め立てたり、川の岸をコンクリートで固めたり、ごみをすてたりするので、鳥の住む場所はどんどん少なくなっています。もし鳥が人間の言葉が話せたら、「もう私たちの住む場所を

減らさないでください。」と訴えることでしょう。

### 《スライドを映しながらのお話》

トキは、白鷺に似ていますが、顔には羽毛がありません。トキは、このような山の中のたんぼなどがあるところに住んでいます。そして、カエル・ドジョウ・バッタなどを食べています。ですから、このような餌になる動物がいなくなると生きていけないのです。

トキの羽根は、日光に映えると、薄いピンクから橙色に近い、きれいな色です。

トキは、餌を朝と晩の2回食べます。天然の餌では、寄生虫などがいたりして都合が悪いので、今は肉（マトン）と卵などを混ぜた人工飼料を与えています。

トキは、繁殖期になると胸・背などが黒くなります。胸のあたりから黒いふけのようなものが出るようになり、それをくちばしで塗り付けるのです。これは、巣に入って卵を温める時に目立たないようにするための工夫なのです。

新しい保護センターでは、一般の人も見学できるようになりました。また、隣に資料館ができましたので、トキについていろいろと勉強することができます。皆さんも、ぜひ見に行ってください。

《常務理事 杉田優児》

## 3. 授業について

授業は、いずれも学校林『きじっ子の森』で、野外授業として行われた。

### (1) 生活科（2年2組）野沢先生 第2青空教室 単元名「秋をたのしく

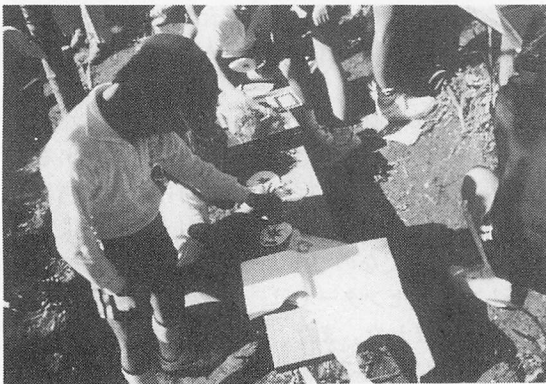
#### —身につけるかざりを作ろう—

紅葉がきれいな季節である。また草や木の実が熟して、様々に色づいている。それらを材料として自由に集めさせ、画用紙の上に接着剤（木工用ボンド）で貼り付けさせていく活動である。

それにしてもいろいろな素材が集まった。どんぐり各種、じゅずだま、ピラカンサ、かえでの葉など。きじっ子の森のどこにいけばどんなものが手に入るか。どんな植物にどんな葉や実がついているのか。面積としては決して広くはないはずの森であるが、植栽に工夫がされていることと、自然に任せていることとがうまく調和して、本当に植物の種類が

豊富である。限られた時間の中で密度の濃い授業内容にしたいと誰もが思うわけであるが、こうなると、面積が広くないことも、かえって長所にもなってしまう。ふだんの学校林の管理が、本当に上手になされていることがよくわかった。

どの児童も、ごく自然に、本当に楽しんで活動に取り組んでいた。植物の葉や実を貼り付けるという単純な活動だが、「かざりをつくる」という目的意識を持たせることによって、身近にある植物の一つの姿に数多く触れることができたわけである。友だちが見つけてきた素材も利用することで、さらに興味が開かれたようである。



こういった授業を、野外でそのまま行うということもすばらしいことである。とかく、素材を見つけたら後は教室でということが多いのだが、森の中にいるということ自体にも自然体験としての意味がある。その点で、学校林の中に「青空教室」が設置されていることがすばらしいと思う。

## (2) 理科(6年2組) 小林先生 第1青空教室 単元名「きじっ子の森の生きる力」

学習課題「野鳥は木の実を食べて森を増やす役目  
をしているのだろうか。II」

本時は、8時間扱いの第7時。前時までに、児童は、いろいろな活動をしてきている。

まず、「きじっ子の森」で木の実集めをし、その同定を行っている。次に、林床の落葉の上などに落ちている野鳥の糞を集め、その中に見られる種子の同定を行っている。さらに、その種子をまいて幼木が芽生えることを確認している。「ウンチ大作戦」のネーミングも奮っているが、内容の濃い活動である。その結果、植物の種子が野鳥の糞としてまかれることによって幼木が育つのではないかとの予想が立てられるようになってきている。

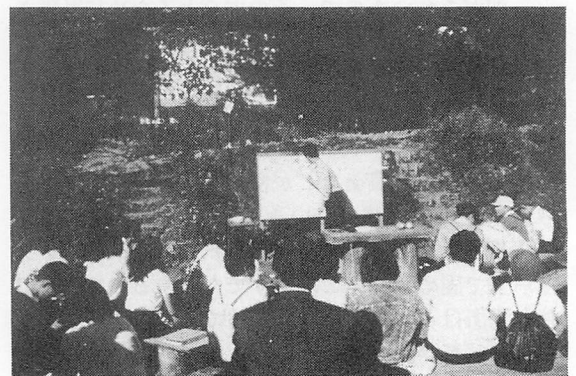
本時は、前時までの先行経験の上に立ち、「きじっ子の森」の幼木調べを行う。画用紙に幼木の葉を貼り付け、何の種か同定していく。その時、調査地を一坪の大きさの正方形にして調査を行う。調査地は、日照、風通し、水はけなど、いろいろな条件を考慮し、数箇所設定し、それぞれにグループを割り当てて調査を行うという活動である。

実際の子供たちの様子を見せていただいたが、幼木についての識別力はかなりのものである。今までの体験(繰り返し指導を受けてきた自然観察)が、それだけの力を養ってきたのだと思われる。また、それは、その時々に限らず、日々の先生方の事前調査(準備)の裏付けによるものであることがよくわかった。学校林も、ただ単に所有しているだけというのでは、こうはなるまい。

理科の授業として展開されているが、学習指導要領に示された指導内容をいかに効率よく理解させるかというのではなく、この目の前の「きじっ子の森」を使って、どんな内容を指導することができるのかといった構想の下に一連の授業が組み立てられていることがすばらしいと思う。

そして、そのために、クウォドラト、葉の形状による種の同定といった本格的な調査技法を取り入れているが、論理的な必然性と、低学年からの経験の積み重ねがあるので、子供たちも無理なく入り込め、いきいきと活動している。

今の子供たちは、環境問題の一般的な理解ができても、その実、個人としての自然体験が貧弱であることが指摘されている。となれば、ますますこの西浦小のような授業が必要になってこよう。目の前の、足下の植物の生の姿に接し、それを識別しながら科学的な理解を育んでいくことの重要性は言うまでもない。身近な自然を理解させる一つの方法を見せていただいたわけである。



### (3) 学級裁量(4年1組) 都築先生

#### 第3 青空教室

第1・2 青空教室が、机と椅子のある野外教室であるのに対して、この第3 青空教室は、広場としての性格を持たせたものである。周りにベンチが配置してある。したがって、ちょっとした動きを伴うゲームなどにはもってこいの場所である。

この時間では、4年生らしく、進行役も児童がとめ、ネイチャーゲームを中心に展開されていった。「バットとモス」「ヘビとカエル」「イエスノー」などが、楽しく繰り返され、私たち参観者も仲間に入れてもらっていっしょに楽しんだ。

単にゲームだけなら、教室でも体育館でも校庭でもできるが、前述したように、草の生えた土の上でのゲームであるからこそ、意味がでてくるわけである。土の感触、草原の感触を、ゲームの体の動きの中で感じ取っていくことは、都市化された生活環境の中に置かれた子供たちにとっては、それだけでも価値のあることである。



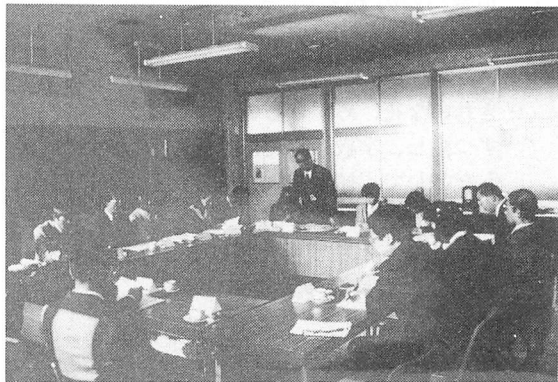
ゲームだけでなく歌も歌われたが、校長先生が音楽の専門家であることにもよると思われるが、どの子供も、自然に大きな声でしっかりと歌うのはさすがであると思った。また、集会活動の時間の最後に全体合唱があったが、これもみごとであった。

司会者は司会者としての役割を果たし、参加者は参加者として、私たち参観者をもてなすことまで考える。これも、一つの自己表現であるが、こういった活動が自然になされることは、日頃の教育の成果であるに違いない。

《常務理事 杉田優児》

### 4. 懇談会についての報告

午後から行われた懇談会は、国松先生はじめ、西浦小の鈴木校長先生、遠くは山形から来られた先生など計20名余りで、和やかな中に多くの質問も出るなど活発に行われた。



#### 《主な内容》

##### (1) 西浦小の研究内容の報告

～愛鳥教育担当の渥美先生より～

教育課程の中で大切な役割を果たしているという学校林、通称「きじっこの森」がどのようにできたかが説明された。

昭和50年頃、松枯れがおき、樹齢200年位の松もなくなり、トビの営巣に適した営巣木が不足し、トビの営巣環境が不安定になってきた。

そこで、市としては、スギ、ヒノキを植樹することを計画したが、西浦小で人口林をやめて、実のなる木を植えたいと申し出、市に借用することになった。

混交林というのは、鳥がたくさん来ることから、そこを学習の場に生かすことができる。それで、理科、生活科はもちろん、音楽、道徳、詩の朗読、相撲など、様々な教育課程の中で活用されるようになった。

学校周辺にはきじっこの森のほかにも山があり、トビの巣がある。西浦小では定時になると、毎日パンなどの餌をあげている。

これらの活動をするために

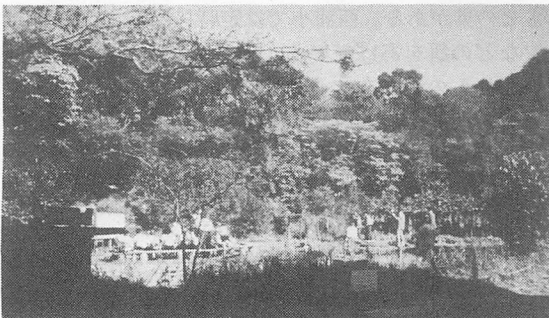
- (ア) 学校教育目標と組織の中にしっかりと位置付けをすることが必要である。
- (イ) 児童活動の場を広げるための児童会活動も、内容を考え、活発化していく。
- (ウ) 「四季旬報」は、自然界の中から季節感ある内容をまとめ、職員に配布している。

(2) 質問の中から

1. 父母支援活動も行われ、理解協力がえられている。
  - ・ 広報部の新聞、探鳥会の計画と実施 (教師は援助)
2. 児童の絵のすばらしさ。
  - ・ 教師のアイデアで児童たちを動かすようにしている。
  - ・ きれいな花、めずらしい花などはクラスに1本ずつ渡し、学級の時間に担任に話しかけてもらうなどして、植物をよく見られるようになっていく。
  - ・ 6年になると精密画が描けるようになる。
3. 自然愛護委員会の活動について  
活動内容
  - ・ 森のパトロール
  - ・ 自然愛護新聞の発行
  - ・ 水族館の管理
  - ・ 自然愛護集会の時のパート
  - ・ トッピー君の (傷ついたトビ) 世話を受け持つ
4. きじっこの森のできるまで
  - ・ 松が枯れたあと、ほかの木がでてきたり、移植したりした。
  - ・ 自然を生かした木と木のけんかがおこる
  - ・ ピラカンサは20本購入した。
  - ・ みどりの基金の利用
5. 教員組織のありかた  
若い人が、活動を推進していき、知識がある人は、組織の下に位置し、援助をする。  
傷ついた野鳥は、病院に持っていくとただで見てもらえる。

自然や地元の環境を十分に生かしていること、意欲的な活動のアイデアがあることを感じた。参加者からの質問もつきないほどであった。

《島田利子》



児童の制作になる『自然愛護新聞』。毎月発行される。



教室を使った『愛鳥ルーム』。これは、その中の一部『愛鳥自然部コーナー』。ポスター、書籍、模型、写真、お知らせ、地図、その他各種資料が展示されている。



生態系モデルを模した展示。小動物の模型を階層別に配置してある。野鳥は、昆虫をはじめとする小動物の上位に位置している。



## 鳥から始める環境教育・鳥につながる環境教育

山梨県牧丘町立牧丘第三小学校教諭  
NACS-J(財)日本自然保護協会普及委員 植原 彰

## その1 学級花壇全部ヒマワリ作戦

2年生の学級花壇はすごい。他の学年はいろいろなお花を少しずつ植えているのに、2年生の花壇は全部ヒマワリ。しかも、去年の2年生が育てた花からこぼれて、自然に芽が出たのを植えかえただけ。労力はほとんど使っていない。

世話もラクチンだった。他の学年がせっせと草取りしているのを尻目に、2年生はみんなでサッカーに興じていた。ヒマワリが他の草を抑えて、どんどん成長してくれるので、草取りをする必要がないのだ。他の学年から日照権をめぐって苦情が出るほどだった。

花の時期はすごかった。大輪のヒマワリが所狭しと並んでいるのだ。圧巻だった。

秋、ヒマワリの種が熟してきた。種がこぼれる前



取ったヒマワリは、よく乾燥させてから種を取る。

に花だけを切り取って、教室のベランダに干しておいた。ベランダはヒマワリだらけになった。充分乾かした後、種を取って、ゴミと仕分け、ビニール袋にしまっておいた。ビニール袋5つ分の種が取れた。作業の最中、

「先生、ヒマワリの種って食べられるんだよ。」と、さっちゃん。みんなで幾つも試食した。

冬、裏庭にある餌台にヒマワリの種を置いておいた。去年もやったことなので、子どもたちは慣れたものだ。背の低いせいちゃん、みんなに寄ってたかって抱き上げられ、種を置いていた。

朝、教室に向かって階段を昇る途中、踊り場からちょうどこの餌台が見える。鳥がきているものなら、大騒ぎだ。

「先生、先生。鳥！」

と、職員室に駆け込んでくる。気の早いのは、さっそく教室から図鑑を持ってくる。みんなで頭を寄せあつては、この鳥かな？ あの鳥かな？ と調べていた。

3年前、受け持ちの6年生たちと餌台にヒマワリを置くことになった。

「餌台に置くエサはどうしよう？」

と問いかけたら、

「買ってあげればいいじゃん、先生。〇〇マートならきっと売っているよ。」

という答。

なにか心にひっかかるものがあったが、子どもが言うことも当然といえば当然。渋々、〇〇マートに行行って買ってきた。

2年前、ばくは1年生の担任だったのだが、餌台のために、2年生の作ったヒマワリの種を分けてもらった。『〇〇マート』よりはマシだが、餌台に置くために作物を育てて、収穫し、それを餌台に置くという、餌台に関わる全ての過程を経験しているわけではない。やっぱり、心にひっかかるものがあった。

そして、昨年、

「今年こそは『餌台』の全過程を子どもたちと経験しよう。」

と、春から計画的に事を進めた。それが『学級花壇全部ヒマワリ作戦』だったわけだ。

さて、自分たちで育てたヒマワリの種を使ったとなると、それを置く餌台も既成のものではなく、何とか自分たちで作りたい。しかも、新たに材料を買ってくるのではなく、廃品を利用して、気軽に楽しくできないか？

考えているうちに、牛乳パックが目についた。これならすでに防水加工されているし、丈夫だから最適では?! さっそく、子どもたちと作ってみることにした。

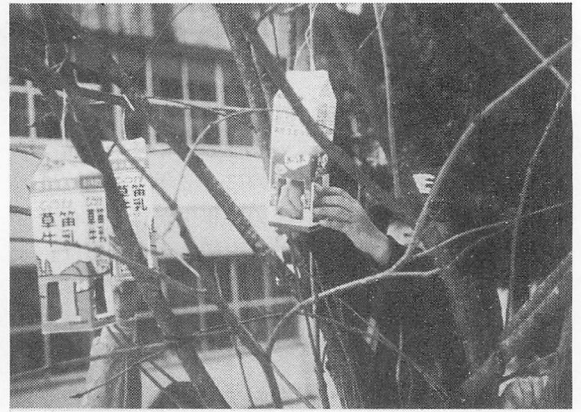


餌台は、とっても簡単!

牛乳パックの側面4つ全部に、長方形の窓を開けた。窓の下の部分は、あまり切り取らないで、エサがこぼれ落ちないようにした。パックの上の方は、雨が入らないように、開ける前と同じように閉じ、ホチキスで止めた。ふたの上部、左右2か所に穴を開け、ここに針金を通して、手さげのようにした。

たったこれだけでできあがりである。これだけで、果たして餌台として機能するか心配だったが、失敗して当たり前、成功すればもうけものと開き直って、実験してみた。

子どもたちは、この手作り餌台を1人1コずつ持って、校庭に出た。木の枝に、餌台の針金を巻き付け、餌になるヒマワリのたねを入れた。



ぼくの餌台に鳥が来ますように……

強い風が吹くと、ヒラヒラ揺れてしまい、中のヒマワリが飛び散るという欠点はあったが、一番大切な『鳥たちが来てくれるかどうか』については合格点だった。

「先生、ぼくの餌台に、鳥が来てるよ。」  
自分の作った餌台に鳥が来ているのだ。感激もひとしおだろう。

## その2 学校を自然情報収集センターに

子どもが鳥の死体を持ってくることがある。  
「おっ、いいもの拾ったねえ。先生にいけない?」  
と頼むと、気前よく、  
「いいよ。また、あったら、拾って上げてあげよ。」

と自然課報員に立候補してくれる。

「おーい、みんな。〇〇が鳥の死体を見つけてきたゾ!」

とでも言おうものなら、すぐに人だかりとなる。鳥の死体はすごい人気だ。

「先生、さわってみてもいい?」

「先生、私にも持たせて!」

冬なら簡単に腐ることもないので、どんどんさわらせている。

初めのうちこそ、恐る恐るなでたりしているが、そのうち、羽を広げてみて、

「わあ、先生、きれいだね。」

と感動してみたり（羽を広げてみて、初めてわかる色や模様もあるのだ。）、長く伸びた足の爪を見てびっくりしたり。そんな友達の発見を見たり聞いた



わあ、きれい！カワラヒワの隠された黄色いラインりして、また、盛り上がる。

相手が高学年の子だったら、ここでちょっとだけ、鳥の体のつくりについて解説してあげる。

「みんなのひざは、こんなふうに後ろに曲がるよね。だけど、鳥の足は…、ほら、前に曲がる。変だと思わない？ じつはね、鳥のこのところは、人間でいうと足首なんだよ。だから、前に曲

がったって、ちっともおかしくないの。ひざはね、もっと上の方であって、羽毛でみえないんだよ。つまりね、鳥は足首から下だけを使って、歩いているようなもんだよ。」

「先生、こう？」

と、ひざを使わないで、足首だけを曲げたり伸ばしたりして歩き始めた子がいた。愉快だった。みんなまねを始めた。なんだか、ペンギンの集団みたいだった。

「ところでさあ、鳥の鼻ってどこにあると思う？…そうそう、くちばしにあいている、この穴が鼻の穴。じゃあ、耳はあるかな？」

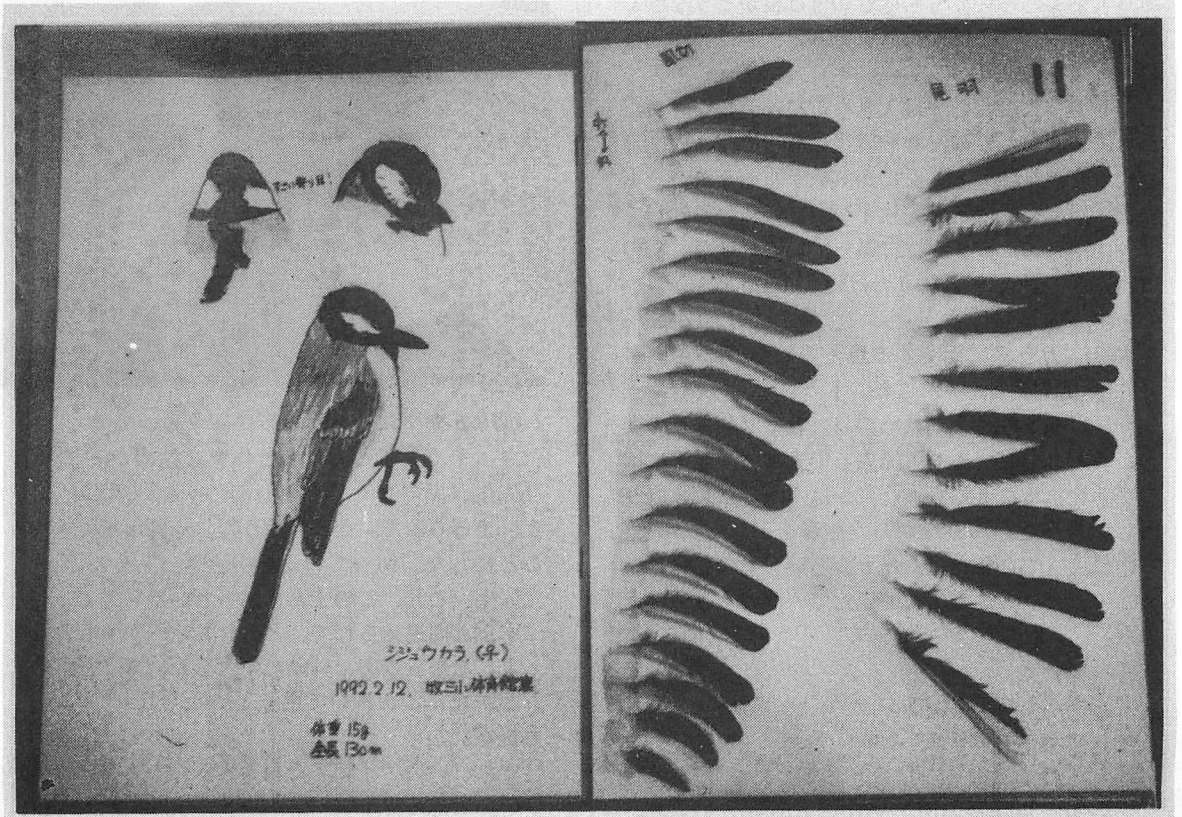
「え～、あるんじゃない？」

「先生、ちょっと見せて！」

ほくの手から鳥の死体を持っていき、何人かで頭を突き合わせて、あっちこっちひっくり返して見ていたが、ついにギブアップ。

「わかんないよ～。」

「見つからなくて、当たり前。毛でね、かくされているんだよ。耳のある場所は、だいたい人間と同



鳥の羽実物図鑑。今のところ 19 種類 25 個体

じ。ちょっと毛をどかしてみると…、これこれ、これが鳥の耳。場所は同じだけど、みんなの耳とは、だいぶ違うね。そうそう、耳たぶがないんだ！」

チャイムが鳴り、休み時間が終わった。子どもたちは残念そうに去っていった。

「手をせっけんでよ〜く洗つときなよ！」

ぼくは子どもたちの後ろから、大声で言った。

こんなふうに、鳥の死体を十分、教育的に(?)使わせてもらった後、ぼくはその写真を撮っている。全体像はもちろん、足の指の様子や、くちばしを上から見た写真なんかも撮っている。これらは図鑑を見ても、なかなかわからないものだ。実物を見て初めて、「上から見ると、くちばしの細い・太いのははっきりわかるな。真正面からくちばしを見るのも、おもしろいものだ。」などと、いろんな発見がある。

次に、精一杯ていねいにスケッチをしている。色えんぴつで色も付ける。お世辞にも上手といえないが、スケッチしていると、また、いろんな発見があつておもしろい。くちばしの付け根がどうなっているとか、真正面から顔を見ると、すごい寄り目になっているとか。

そして、ここから先は大きな声では言えないのだが、子どもたちが帰った放課後の教室で、一人、鳥の羽むしりを始める。なにか気味が悪そうだが、実際は、尾羽と風切羽を一枚ずつ、ていねいに外しては、画用紙にセロテープで貼っていただく。羽の実物図鑑を作ろうというわけだ。

### その3 ガラスに衝突する鳥たちのために

「先生の話はねえ…、これ。」

今日は三学期の学期始めの日。教室で冬休みの楽しかったことを一人一人発表してもらい、最後にぼくが話をすることになった。かばんから紙袋を取り出し、もったいぶりながら、中身を出した。

中に入っていたのは、イカルという鳥の死体。つい昨日、ガラスに衝突して死んでいたのをみつけたのだ。

「かわいい〜。」

「すべすべしてるね。」

「かわいそうだね。」

一通りさわってもらった後、話をした。

「あのね、鳥が飛ぶ所、見たことある？ まあ、ゆっくり飛んでいることもあるけど、いつも、か

なり速く飛んでるよね。鳥は目がうんといいから、壁があればさっと避けちゃうんだけど、ガラスだったら、どうだろう？ そう。あるかないかがわからないから、ぶつかって死んじゃうの。牧三小のガラスだって、去年、たくさん鳥がぶつかって死んじゃったんだよ。」

「へえ〜かわいそうだね。」

「ガラスに色を付けちゃえばいいんじゃない？」

「そういうわけには、いかないさ。」

「先生、なんとかならないの。」

お、待ってました、この言葉。じつは、なんとかなっちゃうのだ。小鳥たちにとって一番の天敵は猛禽。だから、そのシルエットを窓に貼っておけば、小鳥たちは近づかなくなり、窓ガラスに当たって死ぬこともなくなる。これは日本野鳥の会のアイデアだが、これを使わせてもらうことにした。

黒画用紙に猛禽の飛んでいるシルエットを、図鑑を見ながら大きく書き、それを切り取って、窓に貼ろうという寸法だ。



画用紙をワシ・タカの形に切りぬいて……さっそく、子どもたちと作業を始めた。

「先生、黒でなくてもいいんじゃない？」

と、まっちゃん。それもそうだ。赤画用紙でも作ることにした。切っている途中、さっちゃんが、

「先生、これ、このまんま貼ついたらさあ、いたずらと間違えられて、とられちゃうかもしれないよ。だからさあ、『いたずらしないでください』とかなんとか書いて貼ついたら？」

と提案。

「それ、いいアイデアだねえ。みんなも書いた方がいいと思う？」

「いい、いい。絶対いい。」

「じゃあ、書く文は自分で考えてね。」  
と、ぼくが言ったら、  
「先生、そういうの考えるの、難しいからさあ。黒板に書いてよ。」

と、よっちゃんに要求された。

それもそうだ。こういうことはみんなで考えた方がいい。作業を一時中断して、書く文章をみんなで考えた。

「まず、なんて書こうか？」

「やっぱり、『これは一年生がつけました』じゃない？」

「『鳥が死なないように』っていうのを付け加えた方がいいよ。」

こんな感じで、文章を作っていた。結局、

「一年生からの おねがい

このかみは、とりが ガラスに ぶつかって  
しなないように つくりました。

いたずらししないで ください。」

という文章に落ち着いた。

このメッセージを白い紙に書いた。それを、猛禽の形に切り抜いた画用紙に貼り、のりが乾いたところで、校舎北側の窓ガラスの何ヶ所かにセロハンテープで貼った。

昨年は、校舎の窓の下に鳥の死体が落ちていることがよくあったが、この画用紙を貼ってからは一件もなくなった。

## さいごに

### 鳥から始める環境教育・鳥につなげる環境教育

当たり前のことだが、鳥は鳥だけでは生きていけない。自然界の一員であり、他の生き物や環境との関わり無しには、生存できない。

同じような意味あいでも、鳥のことだけにいくら精通していたとしても、それは自然を正しく理解したことにはならない。これも、また当然だ。

だから、鳥のことを見つめながらも、鳥をとりまく環境まで視野に入れるような実践がしたい。

また、人々と鳥たちとの関わりを顧みるような実践や、自分たちの生活の中に鳥たちが溶け込んでいくような実践がしたい。鳥と自分たちの距離が狭まるような実践がしたい。

そんな思いを持って実践してきた。が、なんといっても、学校も自然も一年がサイクルだ。おもしろいアイデアが浮かんだとしても、基本的に1年に1回しかできない。実践の積み上げは、まさに年輪

を重ねるようにやっていかななくてはならない。1年で一歩前進なら大成果！ そんなゆったりとした気持ちで取り組んでいこう！

PS. ぼくは、考えただけで実践してないことを文にするのはとってもイヤなのだが、そんなことを言っていたら、いつになったら発表できるかわからないので、今、やり始めたばかりの2つの実践を、オマケで紹介する。

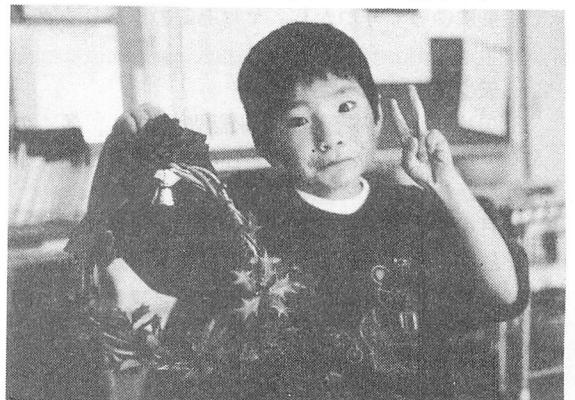
### その1・糞栽培

秋、鳥たちの糞の中に植物のたねが見つかることがある。このたねを小さな鉢に植えてみたら？ 鳥たちを歓待できる草や木を育てることになる。ある程度大きくなったら、校庭や花壇に植えればいだろう。

### その2・リース台を巣台に

昨年から、12月のPTA行事として『クリスマス・リース作り教室』を行っている。今年のリース作り教室の時、昨年作った古いリースを持ってきてもらって、飾りを外し、リースの内側に少しつるを編み込んでもらう（もちろん、希望者だけ）。それを庭などの木の枝にシュロ縄で縛りつけてもらえば、それを土台にして鳥たちが巣を作ってくれるのではないかと考えている。

鳥の巣箱作りは盛んであるが、巣箱を利用する鳥の種類は限られている。むしろ、木の枝の根本などにお椀型の巣を作る鳥の方が多い。大きな木がどんどん少なくなって、お椀型の巣を作る鳥たちだって迷惑しているのだから、巣箱ばかりでは不公平ではないか？ というのが、そもそもの発想である。はたしてうまくいくでしょうか？ お楽しみ。



クリスマスリース。これを巣台にできないものか？！

# 「愛鳥教育 i n g !」

熊本市立愛鳥教育研究会

熊本市立出水南中学校 田中 忠

## 1. 熊本市立愛鳥研究会について

当研究会が発足して6年目、いわば小学校卒業の時を迎えようとしている。思えばはやいものである。会の活動は本年も探鳥会を中心に「親しむ・楽しむ活動」を中心としているが、これまでの実践の上に立ち、指導者用教材の開発に取り組み始めた。

まず手始めに、今年は身近な水鳥のカモの指導紙絵制作を試みている。これは野外指導の時に使えるように、B4用紙の表に色つきの絵を描き、裏には解説文を記すというものである。出来上がったものは少々の雨でもやぶれないように、大型ファイルに入れるか適当なビニル類でパウチするよう工夫検討中である。



紙絵制作

さらに今年の活動では、初めて県南部の人吉探鳥会も実施できた。日本三代急流「球磨川」のほとりで温泉にゆっくりつかり、ヤマセミのホバリング、

## 2. 「矢シギ」との出会い

「矢ガモ」といえば昨年来話題となり、多くの人々が知るところとなった。ところがそれは他人事ではなかった。

9月の白川河口探鳥会のこと、私たちは「矢シギ」とばったり出会った。その日熊本港から出発したバードウォッチングも、最後のレンコン畑へと向かい、水のはられた田へ近づくと、数年ぶりに目にするキリアイが10羽あまり、その向こうになんと珍しいアカアシシギとコアオアシシギがいるではない

そして見事なダイビングで大きな魚をとらえた雄姿を目にすることができ、久しぶりにせわしい日々から解放されリフレッシュできた。また、校内研修等の指導を担当いただける先生も今年6名に増え、心強い。

次に本年の活動を記す。

### 【本年の活動記録】

月日	内 容	担 当
5/17	会員募集	田 中
6/26	愛鳥教育研修会指導 (阿蘇青年の家)	田 中
7/6	室内研修 (ピアノ研)	森 田
7/17	ササゴイのまき餌漁 (水前寺公園)	田 中
7/24~25	阿蘇の野鳥 (産山) 山吹水源・産山水源	坂 梨
8	自主研修	
9/15	シギ・チドリの渡り (白河河口)	緒 方
9/8	野鳥カレンダー制作	田 中
10/11	タカの渡り (金峰山)	松 本
11/27・28	球磨川のヤマセミ (人吉市)	園 田
12/4	野鳥説明紙絵制作	前 田
12/23	冬の水鳥 (上江津湖)	森 田
1/7	愛鳥教育研修会指導 (鳥獣保護センター)	
2/20	里の冬鳥 (小萩園)	松 田
3/4	室内研 (愛鳥ノウハウ)	森 田
3/	来年度への志向	田 中

か。私たちは感激のあまり胸おどらせかわるがわる望遠鏡をのぞきこんだ。やがて一息つき、やや近くなったコアオアシシギをよく見ると、なんと胸に矢のような棒が突き刺さっている。その痛々しい姿に心は一転し沈んでしまった。なんとかして捕獲できればその棒を抜いてやれるのだがと思い、何度か近づいたが逃げてしまい、結局なすすべもなく旅の無事を願うしかなかった。しかし鳥の体は見かけよりずっと軽い、羽毛もそうであるが骨にしても中には隙間がある構造になっていて軽くて強い。筋肉も余

分な所にはついていない。そう考えると、たとえ竹串1本の重さでも鳥にとっては多くのエネルギーを消耗することになるだろう。まして体に突き刺さっているに言うに及ばず、悲しいことである。

### 3. 私の中学校での愛鳥教育の取り組みについて

#### ① 転任1年目の愛鳥教育活動

4月1日、転任校で初めて目にした光景は、私の心を躍らせずにはおかなかった。なぜなら校舎の南西側にグラウンドを隔てて水田が広がっていたからである。真っ青な春の空には気持ち良さそうに天高く舞い上がったヒバリが「ピーチクパーチク」とさえずる。わたしは生まれ故郷に帰ってきたような気持ちになり嬉しくなった。熊本市も近年は都市化が進み、ヒバリの姿はおろか鳴き声すら耳にできる所は、南部と西部のわずかな田園地帯に限られ、その数も少なくなっている。

そこでわたしは、この学校で愛鳥教育につながる活動をどのように展開しようかと考えた。そしてこれまでの経験をもとに、大きく4つの場面で取り組むこととした。その第1は全校生徒を対象とし、第2に授業及び学級活動等を通して、第3は部活動を通して、第4に職員に対してのはたらきかけと考えた。ではその具体的内容について報告したい。

#### (1) 全校生徒を対象として

全校生徒600名あまり、各学年5～6学級で、生徒と職員の意志の疎通もよく、生徒たちは素直で礼儀正しい。また何事にも協力して頑張り、ベストを尽くす雰囲気先輩から引き継がれている。そのような生徒たちにまずはたらきかけたことは、掲示活動や集会での講話、そしてテレビ放送を利用した学習啓発活動である。

##### ① 掲示活動

理科室前の掲示板を利用して、季節の鳥「夏の鳥」や「冬の鳥」などのパネルを展示し解説を添える(科学部の援助)。その他鳥獣関係のパンフレット掲示。さらに科学に関するパンフや新聞記事のコピーなどを校舎内の掲示板や理科室内などにも掲示している。また探鳥会や野外活動などの行事案内も行っている。

##### ② 集会での講話

5月の全校集会で私が月目標を担当し、目標と合わせ野鳥の生活にもふれた。特に子育てからヒナの巣立ち、さらに学習行動までを野鳥の絵を用いながら話した。

##### ③ TVを用いての活動

本校にはAV調整卓が設置されていて、放送室からの一斉テレビ放送が可能である。そのシステムを



理科室前の掲示

給食時間にも利用し、私や生徒たちとこれまでに出演した野鳥に関する民放のTV番組を再放映したり、科学部の活動などを放映した。今後は生徒たちの自作番組にも期待できる。

② 授業及び学級活動を通して

私は1年生の理科を受け持っているが、身のまわりの生き物観察では校庭の野鳥もとり上げた。また5月は、熊本でかごをぬげグランド越しの水田に棲みつき野生化したアフリカ産のホオジロカンムリヅルを、理科室から望遠鏡で全員観察することができた。その後ツルは熊本県内を点々と移動しているが、校区にやってくると、生徒たちが「今日は○○で見かけました。」と連絡をしてくれる。

さらに5月は阿蘇で教育キャンプを行い、初日の夜に自然教室を開いた。スライドを用いて野鳥や植物、地質等の説明をしたり、星座観察などを行った。その成果あって翌日の大観峰登山では、ウグイスやホオジロの声に耳を傾け、中国大陸系のキスミレを発見しては歓声を上げていた。

8月に計画したクラスキャンプは、探鳥登山を行う予定だったが、台風のため実施できなかった。しかし、現在クラスの生徒たちは、校区にあり熊本市の宝でもある「江津湖」をテーマに、野鳥の年度版木版カレンダーを制作中である。私にとっては担任

をした子どもたちと取り組む9作目のカレンダーとなるが、新任教師時代と二校目の小学校では、現在もカレンダーづくりを続けていただいているということでも有難く思っている。

③ 部活動を通して

私が担当する科学部の活動の中には、野鳥に関する活動も取り入れている。それを記したい。

① 探鳥会（校区・その他）

校区周辺のバードウォッチングでは、4月にセイタカシギ、11月にはハイタカとハシボソガラスの空中戦を見る機会を得た。校区外では、白川河口や熊本港、島原などへも出かけ海洋性の鳥も観察した。

② 他校との合同合宿及び探鳥会

（7月）京陵中学校野鳥部と阿蘇で合宿キャンプを実施。互いに友情を交わすと共に、カッコウやホオアカなど高原の鳥と過ごした。

（11月）錦ヶ丘中学校科学部と上江津湖で合同探鳥会を実施。カワセミやカモ類の美しい姿を目にした。

（2月）京陵中学校野鳥部と出水（鹿児島）のツル探鳥会を実施。ナベツルやマナヅルをはじめ、チュウヒやタグリなど干拓地の鳥を楽しみ、久しぶりの再会で楽しい交流学習となった。



合同ツル探鳥会（出水）

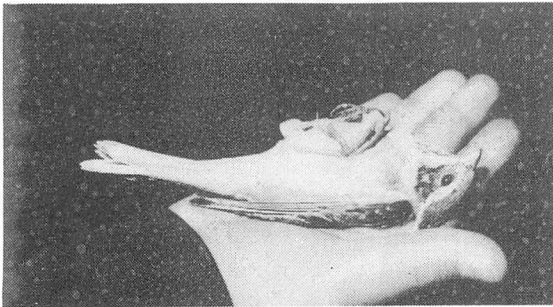


③ 室内研修

基礎的な座学研修をはじめ、VTRによる研修や顕微鏡を用いた羽毛観察、野鳥指導紙絵の色づけなどを行っている。

④ バンディング（標識）調査

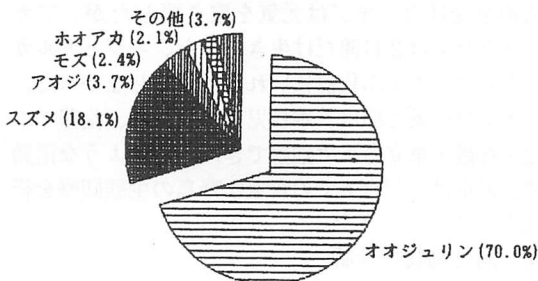
11月から水田の草地で、山階鳥類研究所の標識調査を行っている。授業が終るとグラウンドを越え調査地に行き網を張る。冬の寒さに負けずみな生き生きと活動する。この4カ月で30日調査した。毎回5～10羽くらいの鳥が捕獲でき、環境庁の番号が刻印された小さな足環（リング）をはめ放鳥するのだが、その結果を図にした。図を見ると、7割がアシ原を好むオオジュリン、次にスズメ、アオジとなる。



標識をつけたオオジュリン

季節的には、スズメが11月上旬と2月に群れをつくってアシ原に現れ、オオジュリンは11月中旬から下旬にかけて多数移動したようである。さらに再捕獲された記録から、オオジュリン、アオジ、モズは11月から棲みついていたものがあることもわかった。

また、他県でリングをつけられた個体も数羽捕獲したが、詳細については研究所でコンピュータ処理されたデータが送付されてこないとわからない。



種別標識率 1993年度（冬）

グラフの「その他の鳥」は、セッカ、ウグイス、ツリスガラ、シベリアジュリンであり、シベリアジュリンはとても珍しい記録である。また調査中には楽しいエピソードもあった。ある日スズメを狙ったと思われるハイタカが網に入っていた。私たちは驚き、急いで皮の手ぶくろを取りに車まで走った。3分後、網場へかえるとハイタカは網をぬけて私たちをじろり。捕らえようと慌てて手を出した私たちをしりめにパタパタと飛び立たれ、捕獲は失敗に終わった。しかし、参加していた生徒の一人が「バンディングはおもしろい。」と一言。体験に勝るものはないことを身にしみて感じた出来事だった。

④ 職員に対して

常に事前の共通理解をいただき行動するよう努め、先生方の協力のお陰で私は頑張っている。また、研究会に入会いただいた先生もあり、写真やビデオ撮影の話などにも花を咲かせ、その熱意には頭が下がり私自身が励まされている。

3. まとめ

わたしが愛鳥教育に取り組み始めたのは、昭和55年に教師となった時からである。翌56年には前教育課程のゆとりと充実のもとに熊本市の教育にも愛鳥教育が位置づけられ、さまざまな取り組みが模索し始められた。あれから14年、社会は変動し、国際化、個別化の中で基礎・基本を大切に、新しい学力観を培う時代へと変貌しつつある。しかし全世界人類の課題である環境問題は、誰もが避けて通ることができない。

市教育委員会では来年度、複雑化した組織の見直しの中で、これまでの愛鳥教育を環境教育の一貫として位置づけられると聞いている。環境教育で個々の問題を考えるには、ゴミ問題の解決やホタルなどの小動物の飼育活動なども大切であるが、私は対処療法の域を出ないのではないかと思う。そう考えると、全地球的視野で、人も生物界の一員としてとらえながら生活する未来の子どもたちを育てることが今教育に求められているのではないだろうか。野鳥は全世界を飛翔し、水中から空中に至るまで生活し、草食から肉食の頂点にまで位置している。だからこそ愛鳥教育は、全ての環境を見渡し学べる教育と考える。そうなるよう、来年も研究を重ねたい。



野鳥とともに豊かな地球！  
熊本市愛鳥教育研究会

# 野鳥の観察を通して自然の神秘を探る

—自然から学び、たくましさや豊かな心を培う愛鳥活動—

鳥取県東伯郡三朝町立東小学校 岸本 勉

はじめに

鳥取県の中部山地に接する三朝町は、ラジウムを含む三朝温泉や国宝「投入堂」のある天台宗三徳山徳山三佛寺などで知られている。

本校は、児童数127名、7学級の小規模校で、周辺は豊かな緑と清澄な水や空気に恵まれ、学術的にも多くの学習素材があり、地域に根ざした教育活動に力を注いでいる。

## 1. 愛鳥活動の経過

○ 森林のもつ役割を理解し、自然愛護活動を通して、健やかで心豊かな人間の育成を目指し、平成2年4月、緑の少年団に加入した。以来、保護者、地域を含む幅広い活動を続けている。

○ 平成元年度から飼育魚、茸、野鳥、飼育鳥などに関する鳥取県科学技術教育研究論文に応募し、連続して優秀賞を受賞した。また、平成3年度全国野生生物保護実績発表大会に出場して環境庁自然保護局長賞を受賞、平成4年緑の少年団活動で三朝町顕賞を受けた。

## 2. 愛鳥モデル校としての今年度の活動

### ① 巣箱かけと小鳥の利用状況調査

3つの場所に55個の小鳥用巣箱をかけ、利用状況を調べた。シジュウカラ、ヤマガラが大部分で、利用率は33%であった。

### ② 野鳥保護

地域町民が、草刈りや農薬散布の折り、飛べない



観察を続けたホオジロのひなたち



春の全校遠足で巣箱調査の科学クラブ員たちでいるキジ、アカショウビンの幼鳥を捕獲し、保護依頼を受けた。キジは元気を取り戻したが、アカショウビンは2日間だけ生きていた。キジとカルガモの卵は、人工ふ化器にいれたが成功しなかった。ホオジロの巣と卵は、本校児童が発見し、抱卵・ふ化・育雛・巣立ちまで観察できた。このような活動で、児童は、飼育下での貴重な野鳥の生態観察を経験することができた。

### ③ 飼育動物の世話

学校で飼育している動物は、チャボ、ウコッケイ、キジ、オシドリ、トウテンコウ、マガモ、ウサギ、コイ、ウグイ、フナ、キンギョ、ドジョウ、カブトムシである。これらを各学級や環境委員、飼育委員、科学クラブ、緑の少年団で分担を決めて飼育

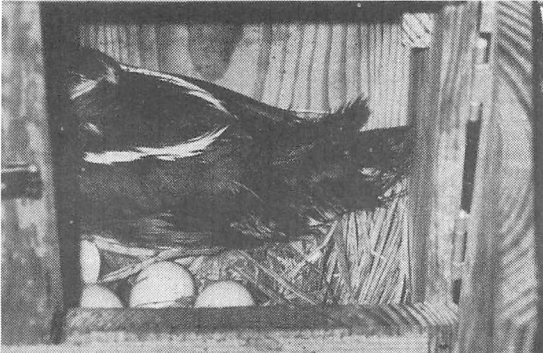
に当たっている。

④ 探鳥会参加

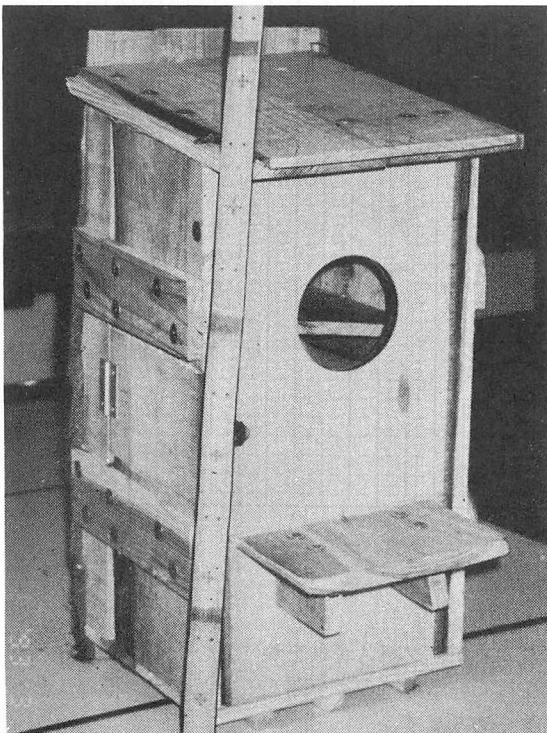
近隣で開かれる探鳥会を児童・職員・保護者に紹介し、親子参加を啓発している。

⑤ オシドリの飼育観察と飛来調査

ア. 鳥取県ではオシドリを「県鳥」に選定している。本校では、平成5年2月オランダ産オシドリ一つがいを購入し、飼育観察を続けている。6月に6個産卵したが、親鳥が抱卵を投げ出したため、残り3個を人工ふ化器にいたしたが、未授精卵で失敗に終わった。



飼育小屋の巣箱の中で6個の卵を温めるオランダ産オシドリのおす



学校で自作したオシドリ専用巣箱

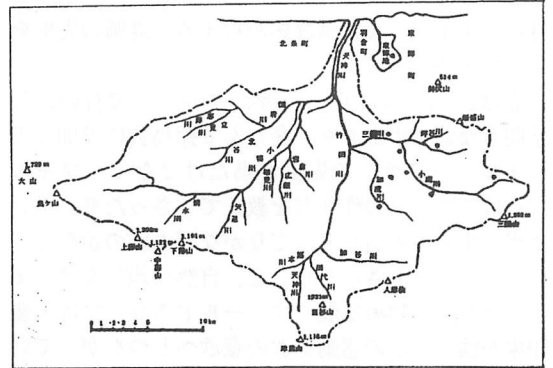
イ. オシドリ専用巣箱（巣穴直径10cm、高さ70cm、縦横35cmのアスナロ材使用）7個を自作し、校下の飛来場所に5個かけた。そのうちの1つに2個産卵したので、巣箱内ふ化を観察したが、抱卵の気配が見えず、人工ふ化にきりかえたが、時間経過で失敗に終わった。

ウ. オシドリの飛来調査

校区には子鹿川、三徳川、ダム、堤があり、特に両河川には淵が無数にあって、冬鳥としてのオシドリの飛来が多い。そのため児童、保護者、関係地域町民に呼び掛けて、隣接市町村も含め、年間を通した飛来調査を9地点で開始して2年目になる。一部留鳥も考えられるので、その実態の解明に全力を挙げている。



三朝町神倉地内の川で遊ぶひとつがいのオシドリ



調査地点の概略図（図中の印が調査地点）

⑥ 今後早急に手掛けたいことは、実のなる常緑樹の植樹、給餌台・水場の設置、巣箱の掃除と巣箱かけなどである。

おわりに

児童の発想を生かした鳥類保護活動はたくさん考えられる。今後は、いままでの失敗ややり残したことを含め、もっと意欲的に取り組み、人間と動物との共生の方法を自然から学びとりたい。

# 地域の環境に根づいた自然教育

犬山市立今井小学校 大嶋 茂子

はじめに

今井小学校は、愛知県犬山市の中心部から、およそ6km離れた東部丘陵地帯にあります。周りには、広々とした国有林（八曾自然休養林）や東大演習林があり、自然が破壊されることなく確保されています。学校の西には成沢川が流れています。成沢川は、小さな沢を集めて今井地区の中央を南へ流れ、入鹿池へ注ぎ込んでいます。沢の上流には灌漑用溜池が設けられ、ところどころに湿地が形成されています。

本校では、この豊かな自然を生かして愛鳥活動、並びにみどりの少年団活動を基盤に、自然教育活動を行っています。全校の児童数は61名で、多くの活動を学校全体で取り組みます。

活動の一部を紹介します。

## 1. 探鳥会

春（4月）、夏（6月）、秋（10月）、冬（2月）と年4回、東大演習林から3名の講師の先生を迎えて実施します。

春は1・2年、3・4年、5・6年のグループで行い、入学間もない1年生でも、楽しんで探鳥会に参加しています。ベテランの先生が鳥だけでなく、フキのはっぱでコップの作り方を教えて下さったり、タンポポの生え方の話やどんぐりがなぜ丸いのかなどという話をして下さったりして、自然に親しんでいます。そして、初めて覗くフィールドスコープは大変印象が強く、この感動が次の意欲へとつながっています。

夏以降は、1～6年の縦割り班で行い、高学年が低学年に教えている姿が見られるようになります。

秋は親子探鳥会です。下にのせた新聞は、自然クラブ員が家庭向けに発行したものです。

## 2. ツバメの営巣調査

ツバメが飛来する6月には、4年生以上の児童の一軒一軒を回り、ツバメの巣があるか、ツバメが今年もきているかどうか調べます。留守の家もあり何度も出かけていかなければならないこともあって大

ツバメの営巣調査結果

○・・・今年営巣

家号	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4	5
2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
29	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
49	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
47	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
48	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
49	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
52	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
55	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
57	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
58	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
62	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
65	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
67	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
71	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
73	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
74	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
75	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
76	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
79	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
82	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
84	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
84	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
94	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
95	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
97	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
98	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
100	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

変ですが、ツバメが巣をかけるのを喜んだり守ったりしている地域の声を聞くことができ、得ることも多くあります。

 <p>モズ</p> <p>モズは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>	 <p>シノカラ</p> <p>シノカラは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>	<p>自然新聞 No.3/30</p> <p>10月28日(金)に、親子探鳥会がありました。次のような鳥を親子でみつけてみました。</p>
 <p>(ココロ)</p> <p>ココロは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>	 <p>(トビ)</p> <p>トビは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>	 <p>ゴサギ</p> <p>ゴサギは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>
 <p>ヒナ</p> <p>ヒナは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>	 <p>ホドリ</p> <p>ホドリは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>	 <p>セギシ</p> <p>セギシは、秋の鳥。木々の葉が黄色や赤色に変わるころ、木々の梢に集まり、さえずる。鳴き声は「キーン、キーン」という。冬は、雪の下で越冬する。</p>

### 3. キジの放鳥

昭和49年以来、毎年10月、減少しつつある山野のキジなどの増殖を図るため、猟友会の人達といっしょにキジの幼鳥を成沢川で放鳥します。今年度は、30羽放鳥しました。目の前で鳥を見ること、まして鳥に触れるということは感動そのものです。その鳥が自分の手の中から大空へ飛んでいくのです。あとあと、「成沢川の堤防でえさを探していたよ。」「山の方へ飛んでったよ。」と、とてもキジを身近に感じています。

### おわりに

鳥だけでなく、1本の木でも1つの道端の花にでも感動する子、自然のありがたさがわかる子どもを育てていきたいと思っています。

時間の確保や他の学校行事との関連など問題点も多くありますが、自然に触れる機会を多くすること、自然に触れる行事を常に保ち続けること、それに、一人一人が取り組める場を設定することが、とても大きなポイントだと思って、これからも自然教育活動をすすめていきたいと思っています。



# 自然体験活動の一環としての野鳥観察

—自然愛護少年団を通して—

北海道斜里町立峰浜小学校 鈴木 哲夫

はじめに

本校は北海道の東端、知床半島の付け根、斜里町の東方にあり、東に海別岳と知床連峰、南西には斜里岳、そして北にはオホーツク海の内海を持ち、山と海の調和のとれた大自然に恵まれている児童数16人(戸数82戸)の僻地小規模の学校です。

明治44年の開校以来83年を経過しています。開校当時は、前人未踏の地でうっ蒼として熊の巣といわれる程の密林地帯でありましたが、現在では麦・ジャガイモ・ビートを基幹作物として、広大な面積を利用した大規模農業と、オホーツク海の豊かな海から漁獲されるサケ・マス・カニを主体とした漁業を経営する地域であります。

また、冬期1月下旬～3月中旬にかけては、オホーツク海に到来する流氷が峰浜の海岸にも接岸し、海は白一色の世界に変化する地域でもあります。さらに知床半島の多くは国立公園に指定され、原始林が残されています。また、学校のグラウンドにはキタキツネやエゾシカが訪れるなど、日本でも数少ない自然に恵まれた地域でもあります。

## 1. 峰浜自然愛護少年団活動

知床の自然を科学的に学び、自然に親しむと共に自らの心身を鍛え、知床の自然愛護と郷土愛を高めるために、昭和49年峰浜自然愛護少年団が結成され、以来20年間地域の人々と児童・教師父母が一体となって活動を行ってきています。

平成5年度の活動内容は、次の通りです。

### (1) 地域内清掃奉仕活動(5/15・10/17)

春秋2回の地域の道路周辺清掃活動(ゴミ拾い運動)。春は峰浜スキー場へ通じる町道を中心に、秋は知床へ通じる国道を中心に実施していますが、年々回収するゴミの量が少なくなっていると、子ども達は喜んでいました。

### (2) 野山を歩く活動(5/26)

地域の野山を歩き、地形や地質や植物の観察を行い、同時に緑化パレードを実施し、清里営林署峰浜担当区で緑化宣言を行いました。そして、営林署の人から森林の働きのお話や緑化パレードの素晴らし

さについておほめの言葉をいただき、子ども達は満足していたようです。



### (3) 知床国立公園探勝(7/18)

知床国立公園内のラウス湖を訪ずれ、雄大な自然の素晴らしさを体験しました。

### (4) 自然と親しむ会(9/10)

知床の自然観察を通して、地域への関心と郷土愛を高めるために、写生会と魚釣りを斜里町中心部の斜里港で行いました。あいにくの雨になり、晴れ間を縫っての写生会でした。また、写生会終了後は、子ども達は、小雨の降る中を魚釣りに夢中になっていました。魚はチカや鯉の子などで、多い子で50匹、少ない子でも10匹以上釣れましたので、子ども達は満足していました。

### (5) 野山を歩く活動(10/13)

秋の野山を散策し、木の葉や木の実の収集、さらに川に住む生物を観察すると共に、ジンギスカン料理を行い昼食を満喫しました。今年は、山も不作でブドウ、コクワの実が少なく、一緒に行った父母はがっかりしていましたが、子ども達は、道端にあるブドウの実が今年は無いことを知っていたようで、むしろ父母・教師が子ども達に教えられたようです。

### (6) 冬の星座観察会(12/4)

斜里町博物館へ行き、冬の星座についてのお話を聞き、天体望遠鏡による観察と肉眼による観察を行いました。当日は、久しぶりに観察に適する天候となり、オリオンやスバルそして星雲等、初めて観る冬の星座に寒さも忘れて感激していました。

### (7) キャンプ学習会(7/24・25)

(8) 人形劇による町老人ホーム慰問 (12/24)

(9) スキー遠足 (3/3)

その他日常の活動として、5月に野鳥の巣箱の清掃、積雪後毎、毎日野鳥の餌台への飼料やりと飛来する野鳥の種類と数の観察等の活動を行っています。毎日、スズメ、カケス、ヒヨドリ、シジュウカラ、ハシブトガラス等が飛来しています。

◇今後の学習について

自然愛護少年団活動により、子ども達は、春、道端の木々の芽や花の咲く時期や種類を調べるなど、自然に対する関心や、ごみがおちていたら進んで拾うなど、自然を大切に作る心と、自然を科学的に調べる意欲がついてきています。

現在、学校週5日制の実施により、学校行事の内容の見直しが求められています。環境教育に対する重要性も指摘されていますので、自然愛護少年団の活動が今後も継続して活動できるように、方策を模索しているところです。

## 2. 土曜休業日を利用しての自然体験活動

子ども達の土曜休業日の過ごし方は家庭によって異なりますが、校下の家庭は農・漁業経営者が多く、土曜日が休業になることは、冬季間を除いてはほとんどありません。そこで、この休みを利用して自然体験活動の場を設け、先生方と共に次のような活動を行っています。

(1) バードウォッチング (5/8・2/11)

5月は学校周辺の森林と海浜を中心に実施。オオジシギ、ベニマシコ、カワラヒワ等の渡り鳥と、アカゲラ、ゴジュウカラ、シジュウカラ等の留鳥とカモメが多く観られました。特にオオジシギの「ガガガー」という急降下するときの羽音に、いつも聞き慣れています。あらためて驚いていました。また、遠くオーストラリアから渡ってきた鳥であることを教えてもらい感激していました。

冬は、流水の接岸と共に渡って来るオオワシ、オジロワシを中心に、アザラシ等の観察会を、知床半島近くのウトロで博物館学芸員を講師として実施する予定です。

(2) フィッシュウォッチング (6/9・9/11)

6月は、斜里町内の「とうつる湖」で、フナ、ウグイ、イトウ釣りを行いました。魚釣りに適する場所の下見を父親と先生が事前にしてくれました。当日は天候にも恵まれ、参加者全員が5～10匹ずつ釣ることができました。

予定の時間を1時間もオーバーし、釣った魚は「次の年まで大きくなあれ」との願いをこめて湖に戻してやりました。9月は校下の「日の出港」でのチカ、鯀の子釣り大会を実施しましたが、「潮回りが悪い」(漁師の人の話)と言うことで、多くは釣れず子ども達は少し残念がっていました。

(3) フラワーウォッチング (7/11)

町内には、以久科原生花園があり、この時期、エゾスカシユリ、エゾキスゲ、ハマエンドウ等30種類が咲き乱れ、一面が花園となります。野生の花の美しさや、色、形、つくりを心ゆくまで観察しました。



以上、土曜休業日を中心としながら、観察に適した時期に、体験活動の場を設け実施して来ました。毎回、子ども父母合わせて20名程の参加者があります。これらの活動を通して、渡り鳥の種類などを進んで調べたり、飛ぶ鳥を観ては種類に関心を示したり、海浜に行っては貝がらを収集したりするなど、身近にある自然を観察したり調べようとする態度が高まっています。

おわりに

豊かな自然環境の中で生活している子ども達は、何も働きかけをしなければ自然の素晴らしさや自然を構成する環境要素について関心を示すことが少ない。そのため、地形や動植物さらに環境要素に触れて観察し、調べたりすることにより疑問が生まれ関心が高まっていくものと思っています。

そこで、今後とも自然体験活動の場を多く設けて、自然の素晴らしさを知ると共に、厳しい自然の中で生きる知恵を体得し、人間の生活と共存できる自然保護の在り方に関心が高まるように働きかけを続けていきたいと考えています。

## 「都会のオアシス帷子川」

—よみがえる水辺で野鳥や魚や水質を調べて—

横浜市立帷子小学校 松下 希一

はじめに

本校は、横浜市のほぼ中心にある。学校のわきをコンクリートの垂直な護岸でできた帷子川が流れている。この川は、昭和40年代には「死の川帷子川」と言われていた。しかし今では、水質は見違えるほどきれいになって来た。

さらに、ここは海にも近いため、潮の満ち干があり、ほんのわずかに干潟もできる。鳥たちも集まりだして来て、都市の中のオアシスになってきている。

昭和63年5月より星川駅から帷子小学校間で野鳥観察をし、記録を取り始めた。

平成元年度からは、ウォッチングクラブが発足し、活動が全校に広まって来た。

都市の中にあるオアシスに訪れる野鳥たちの記録や水質の変化の様子を調べ続け、訪れて来る生物たちを保護するとともに、よみがえってきつつある帷子川の存在を近くの人たちに紹介して来ている。

### (1) 朝の活動

土曜日の始業前に学校周辺の帷子川で観察している。水質調査の項目は、水温、(気温)、COD、透視度等である。このごろは、COD10、透視度60センチメートル程度である。

### (2) クラブの時間の活動

昨年8月には、学校のすぐ近くに親水公園ができ、スロープを歩いて、帷子川に入れるようになった。下に降りると、鳥たちには警戒され観察しにくくなってしまうが、足型を石膏で取ることができたり、鳥と同じ目の高さで川を見ることができた。

魚類としては、ボラ、コイ、キンギョ、ヒメダカ、フナ、マハゼ、アユ、ウナギ、等を観察することができた。特に最近では、たくさんのアユを観察できるようになった。

### (3) 他の調査活動

水質と鳥たちの様子を比べたり、上流部の様子が知りたいという願いをかなえるために上流調査に出かけた。

10時間近く歩いた。観察された鳥は、種類、数と

もに帷子小周辺が一番多かった。水質検査の結果を見ても学校の辺りが最もきれいであった。

護岸工事のために川の中の土が削り取られてしまうことになった。干潟になっている部分が削り取られてしまうので、水深と生き物の関係を調べた。

やはり、干潟があり草も生えている帷子小の前が一番多くの生き物たちを見つめることができた。干潟は鳥たちに餌や休む場所を提供していることが確認された。

### (4) 広報活動

今年度は、3月26日に帷子小学校を会場にして、「川と緑を考える子供会議」が開かれる。この子ども会議では、計画を立てる段階から子供たちの代表(実行委員)が参加し、当日の運営も受付から司会・記録・マイク・照明など可能な限り(小中学生の子供たちの手で運営されている。今年度は、いまままで卒業と同時に遠ざかってしまうことが多かった中学生たちが、多く参加し活躍が期待されている。

### (5) 保護活動

傷ついたり死んだ鳥たちを保護したり、死体は記録して手厚く葬ったりしている。

川の水の着色や魚の大量死をいち早く通報すると共に調査にも協力してきた。

干潟を大事にした工事ができないかと県知事にお願したところ、流水に支障がない限り配慮したいとの返事もらった。

3月に予定されている子供会議の際には、参加する子供たちの手で、記念植栽として帷子川にアシを植えることになっている。

卒業製作として60個の巣箱を校内や川沿いにつけて来た。

校内に、生物育成観察用小川が作られた。コンクリートの上に荒木田土を張り、水性植物や小動物が育成し易いように作られた。この作業には5年生が学年全体で手伝った。夏には、300匹余りのプールのヤゴを3年生が捕まえて放した。さらにクロメダカを増やしたりして、校内に自然を復元させている。



実践講座

# 街中の校庭でもできる面白い自然観察ビンゴ

常務理事 平田 寛重

これは、昨年の6月、勤務先の学校で、小学3年生を対象として取り組んだ実践例です。街中に位置しているため、自然に恵まれているとはいえ、自然学習の実践もなかなか厳しい状況ではありますが、トライしてみました。また、この日は、父母参観日であったため、親子で一緒に楽しんでもらうと、一石二鳥？をねらった企画でもありました。

街中の学校では、自然が乏しいものという思い込みがどの先生にも強くあるため、野外に子ども連れ出して、原体験や自然教育をすることをつい控えがちです。確かに街中の環境では、自然が貧弱なためダイナミックさに欠けますが、その分少しの勉強で街中の自然のしくみやつながりは見えてくるものです。自然のおもしろさ、生き物たちの賢さに感動しながら、身近な自然とかかわってみたいかがでしようか。

ただ、自然観察といっても、一度に、個人がガイドできる人数には自ずと限界があるため、セルフガイド方式を取り入れました。画用紙8切（B4大）を縦に使い、その端に荷札をホチキスでとめて課題を示し、各ポイントにつるします。そして、その課題を読みながら自然観察を行うようにしたのです。課題は9問あり、その内容は以下に掲載してあります。（ルートマップは以下のページを参照。）しかし、この方式では、参加者にとって励みになる要素が少ないので、自然に対して関心が薄い子どもたちには、飽きがきてしまいがちです。そこで、観察用紙にビンゴのゲーム性を取り入れて、楽しみを持たせました。

自然観察の解説については、本来はその場で行うものですが、セルフガイドの場合は、最後にまとめて答え合わせをします。その際、解説に必要な実物や模型、図表などを予め用意しておく必要があります。

このような方法で、ビンゴ用紙に自然観察で行った内容（答えなど）を書いて行うシステムを「自然観察ビンゴ」といいます。これは、平塚博物館の浜口哲一氏が考案されたものです。（自然保護1990.1.NO.332日本自然保護協会）

ここで、自然観察ビンゴについて、もう少し説明をくわえておきましょう。

解答（観察）用紙

自然観察ビンゴ なまえ  
 ○の中に1～9までの数をすきなように入れてください。同じ数字は1回しかつかえません。

○	○	○
○	○	○
○	○	○

まず、観察用紙に氏名を書き、9つある左上の小さな丸（○）のなかに、1～9までの任意の数を書き入れます。この時、同じ数は2回以上使いません。これで準備はOK。

次に、ルートマップを見ながら、1番の課題の所に行き、その課題に挑戦します。そして、順次9番まで観察して、集合場所にもどります。

今回は参加者が多く、時間に余裕がなかったため、1から順に観察していると渋滞してしまう恐れがあるため、参加者を予め分散させることにしました。（空いていそうな課題の所からやっていただきました。）

課題の答えは、大きな四角の中に書いてもらいます。自分で感じたり（香り・味・音・肌ざわりな

ど)、考えたり、番号を選んだり、スケッチをしたりして、自分なりのオリジナリティにあふれた観察をしてもらい、その結果を書いてもらいます。

最後のまとめで、答え合わせをしながら、解説をし、自然の見方、おもしろさなどを参加者に感じてもらえれば十分です。

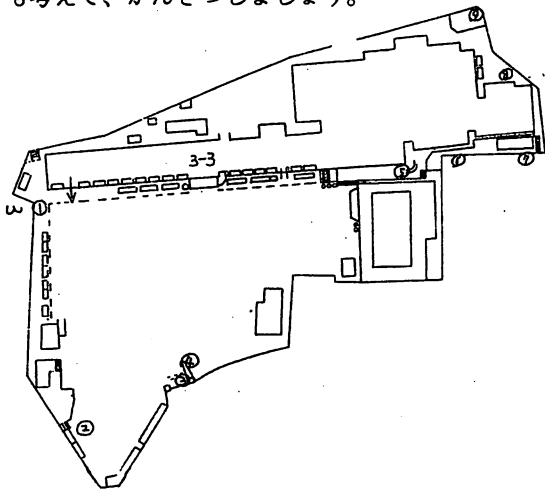
そのあと、表彰式を行い、ビンゴの得点の多い人にキャンディーなどのプレゼントをすると、参加者の雰囲気もなごやかになり、盛り上がります。

**自然観察ビンゴ・ルートマップ 93.6.19**

下の地図(ちず)は校庭(こうてい)のようすをしめたものです。①~⑨までの数を書いてある所にもんだいがありますから、そこに行って、もんだいを見て、こたえを左のビンゴの紙の自分でかかってにつけた数字のらんに書いてください。こたえあわせは、終わったあとに、教室でおこないます。

なかみをしらべたり、数をかぞえたりするはんそくは、してはいけません。

今日は、さんかしゃが多いので、①からでも⑨からでもどちらからやってもかまいません。おおぜいの人が、かんさつしますので、後からくる人のことも考えて、かんさつしましょう。



**【問題】**

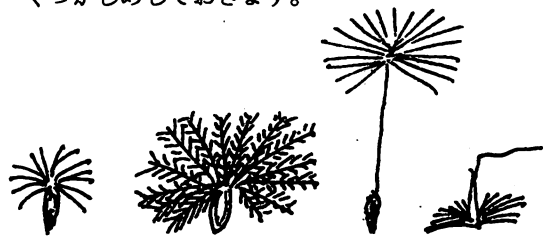
1. 白いオニノゲシのわた毛があります。わた毛は、パラシュートのように風に乗ってとくへ行き、なかまをふやします。オニノゲシのように、わた毛のついたたねをもつ花を一つ書いてください。
2. えだの先にイロハモミジの「み」があります。

スケッチをしてみましょう。

3. ムラサキ色の実は、ヒイラギナンテンの実です。実の中にたねはいくつあるでしょうか。取って、中をしらべてはいけません。
4. この木は、ハナミズキといいます。さて、この木のふるさとは、次の1~3のうちのどこでしょうか。
  1. アメリカ 2. イギリス 3. フランス
5. ツツジのピンク色の花がさいています。花のまん中の上に赤いてんががあります。これは、いったい何のためにあるのでしょうか。
6. このこいみどり色をした「はっば」は、どんなかおり(におい)がしますか。たくさんの人がかうので、ふくろの中にあるものをくりかえしつかってください。
7. バスだよーん。このしかくは、何も書かないでください。
8. アジサイのきれいな花がさいています。さて、この花びら(ほんとうはがくと言う)の数は、全部で何まいでしょうか。
9. わたしは、ヨモギです。わたしのはっばをつかって、作る食べものはいったい何でしょう。

**問題の解説**

1. 《タンポポなど種にわた毛をもつ植物が書いてあれば○》  
オニノゲシのわた毛は、右の図を見て下さい。キクのなかまは、たねにわた毛がついているものが多いです。また、わた毛のついているたねを、いくつかしめしておきます。



オニノゲシ ノアザミ セイヨウタンポポ ススキ

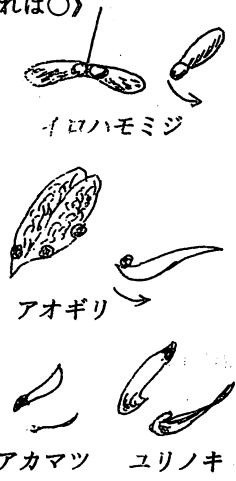
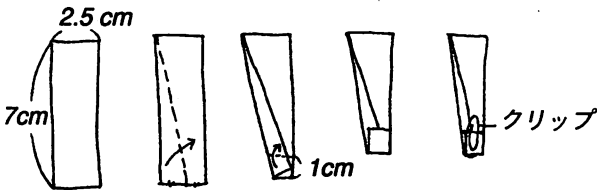
2. 《右のようにかけていれば○》

イロハモミジのたねのスケッチです。たねには、つばさのようなものがついています。このつばさが、風にふかれて飛ぶようになっています。わた毛のパラシュートと同じようにたねを遠くにはこびます。

イロハモミジのように、たねにつばさを持つものをいくつかしようかいしておきます。

また、おりがみとゼムクリップをつかってイロハモミジのたねのもけいを作って、飛ばすこともできます。これは、ゼムクリップのとめる場所によって、まわり方がちがいます。

作り方



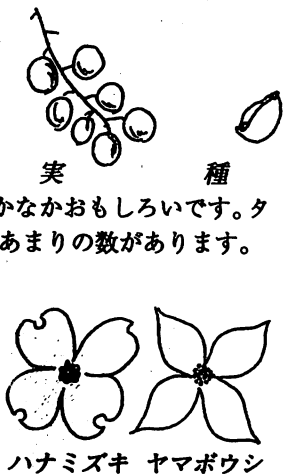
3. 《1こ》

ヒイラギナンテンの種数は1こです。この時期、木の実は少なく校庭でも熟した実は、ヒイラギナンテンだけでした。

草の種も数えると、なかなかおもしろいです。タンポポなどは、100こあまりの数があります。

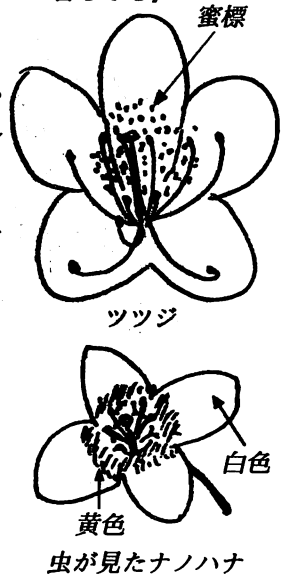
4. 《1. のアメリカ》

ハナミズキのふるさは、北アメリカです。アメリカヤマボウシと言う名前もついています。日本のサクラをアメリカにおくった時に、おれいにおくられてきたのが、このハナミズキです。日本にはヤマボウシというハナミズキに似た木があります。今ごろ、大山に登ると、4まいの白い花びらの花を見ることができます。



5. 《虫に来てもらうための目じるし》

ツツジのなかまには、5まいのはなびらの1まいにこい点々がついているものがあります。これは、密標（みつひょう）と言い、虫に来てもらうための目じるしなのです。アヤメやハナショウブのなかまにも、同じように花びらの所にもようがあります。また、ナノハナなどは人の目には、ぜんぶ黄色に見えますが、虫の目には、まん中の所だけが黄色に見えるようになっているものもあります。



ツツジの花では、どうして、花はそんな工夫をして虫をよぶのでしょうか。虫に来てもらわないとこまることがあるからです。それは、自分の花粉を他のなかまの花にはこんでもらいたいからです。そのために、虫の大すきな蜜（みつ）をつくって、虫たちをまっているのです。まっているだけではなくて、蜜はこちらにありますよとわざわざ目じるしまで工夫してまっているのです。花にとっては、虫に来てもらってかふんをはこんでもらうことはなかまをふやすためにとてもだいじなことなのです。

6. 《自分なりの香りが書けていれば○です。》

こいみどりののはっぱの香りは、いかがでしたか。わりといい香りがしたのではないかと思います。鼻（はな）で匂い（におい）をかぐことは、ふだんのくらしではあまりありません。食事の時に、工夫するくらいではないでしょうか。じつは、このはっぱはシチューなどの煮込み（にこみ）りょうりによく使うローリエ（げっけいじゅ）です。ゲッケイジュは、4・5月に黄色い小さな花をたくさんつけます。



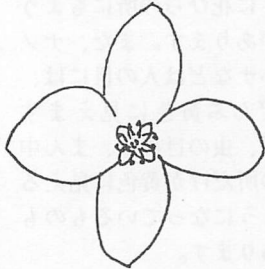
7. パス

パスは、ゲーム性を取り入れるために、用意します。パスは空欄（くうらん）となり、○がつきませ

ん。ビンゴですから、○がつかないとビンゴのとく  
てんがへります。そのことによって、初心者（しょ  
しんしゃ）やベテランも同じように楽しむことがで  
きます。

8. アジサイのはなびら（？）の数は704まいで  
した。おまけのおまけで500から900まいまで  
の人は○です。

アジサイのきせつです。青やピンクのきれいな花  
がさいています。アジサイの花びらと言われている  
ところは、ほんとうは「がく」とよばれるところで  
花びらではないのです。



ガクのまん中にある小  
さい花びらがほんとの花  
びらなのです。アジサイ  
のようにほんとうは花び  
らではないのに花びらの  
ように見える花を装飾花  
（そうしょくか）とい  
います。やはり、それなり  
開いているアジサイの花  
の意味があるのでしょう。

アジサイのように数える数が多い場合は、たくさ  
んの人に協力して、数えてもらうとはやくできま  
す。

### 9. 《草もち・よもぎだんごなど》

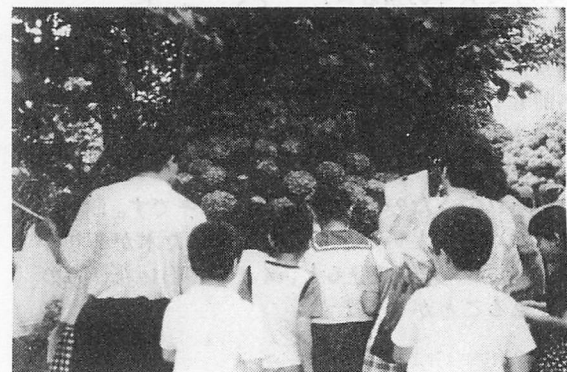
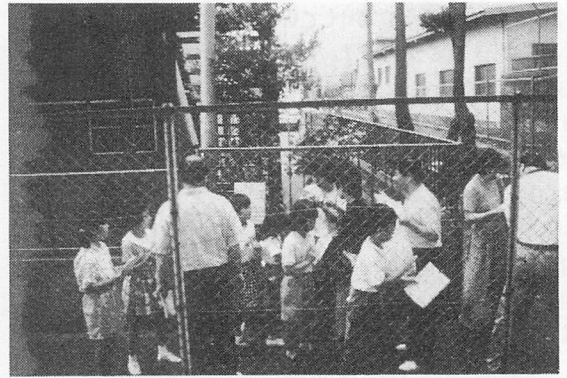
ヨモギは、春先にその年生まれの新しいはっばが  
でます。そのはっばをつみ、だんごにまぜて食べる  
と春の香りがします。

正月の七草がゆにはじ  
まり、よめなごはんやフ  
キノトウのみそあえやツ  
クシのにびたしなど、野  
草料理は季節の香りを感じ  
るのには、なかなかの  
ものです。また、ほどほ  
どいただくのがよらしい  
でしょう。



ヨモギのはっば

課題の設定については、参加者が五感+第六感を使  
い、オリジナリティにあふれた（自分だけの感じ  
方を大事にする）表現ができるように内容を工夫す  
ることが大切です。課題の設定によって参加者の充  
実感が違ってきます。「こんな身近な所にこんなお  
もしろいことがあったんだ。」と感じてくれるよう  
な感想が出れば、身近な自然を意識するようになり  
、自然とのかかわりも楽しいものになってきま  
す。



# 「おり紙のプロペラ

6月21日の1時間目に  
おり紙でプロペラを作  
て、回しました。さいし  
は、回らなかつたけど、  
クリップをななめに、  
したら、回りました。た  
すごくうれしかったです。

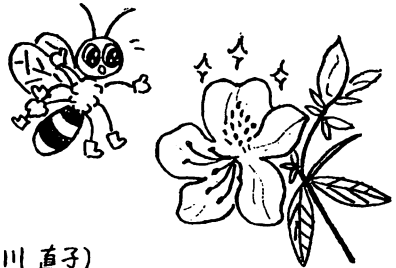


石ばしとも子

# 6月19日 3年3組 ふれあい学習

自然観察ビンゴゲームは、あいにく  
の小雨でしたが、校庭の木の緑や  
アジサイがとてもきれいでした。

クイズは とてもむずかしくて、子ども  
たちに答えを聞かれて おもわずしん  
けんになってしまいましたが、ツツジの  
クイズなど とてもためになり、楽しい  
一時間をすごしました。



(横川直子)

# プロペラ 6月21日

今日：先生が紙とク  
リップをくれました。  
それで、プロペラを  
作りました。はじめ  
教室でやりました。  
こんどは、校庭いで  
もやりました。ジヤ  
ンゲルジムでやりま  
した。こっちは、なな  
めにクリップをはめ  
ることで、石川ひろみ



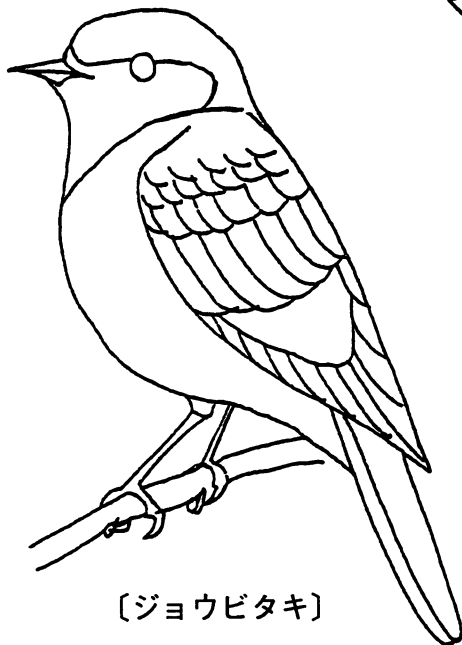
# 6/19 授業参観について

なごらの 疑った自然観察だった。問題が難  
気ばかりに見えてしまう事があるなど、なるほどと  
いった感じで、先生の趣向がうかがえる内容だった。  
これをきっかけに子供たちが遊びの中で、自然観察  
の目を育ててほしいと思った。

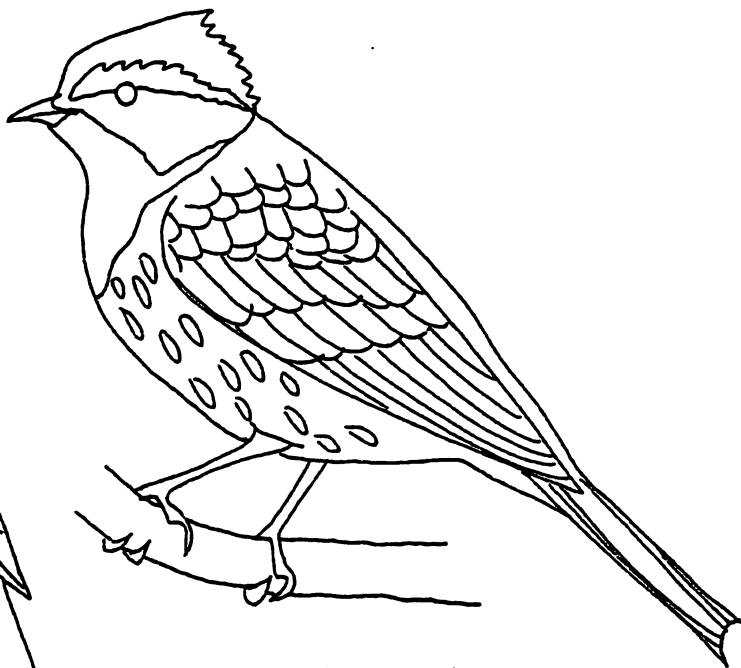
金谷代



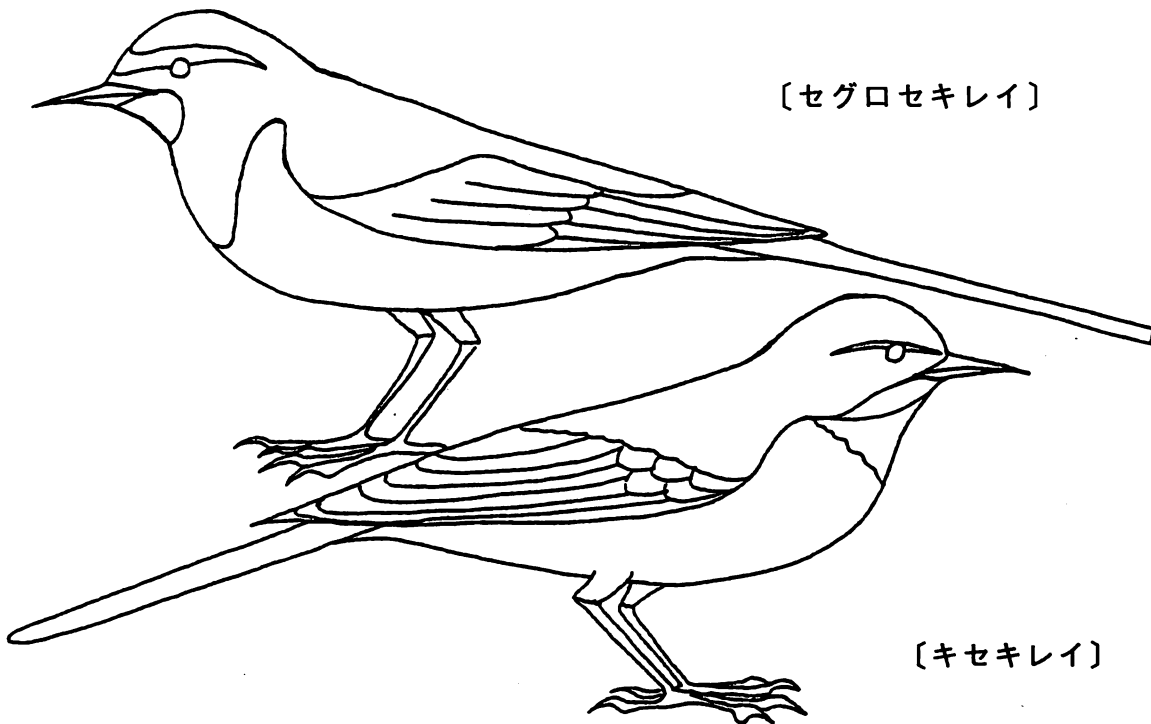
ぬり絵



〔ジョウビタキ〕



〔ヒヨドリ〕



〔セグロセキレイ〕

〔キセキレイ〕

全国愛鳥教育研究会冬期研修会のご案内

# 「バード&ネイチャーウォッチング～入門編～」

都心では比較的 naturally 恵まれている東京都世田谷。そのなかでも冬の多摩川は、ネイチャーウォッチングに最適な場所です。

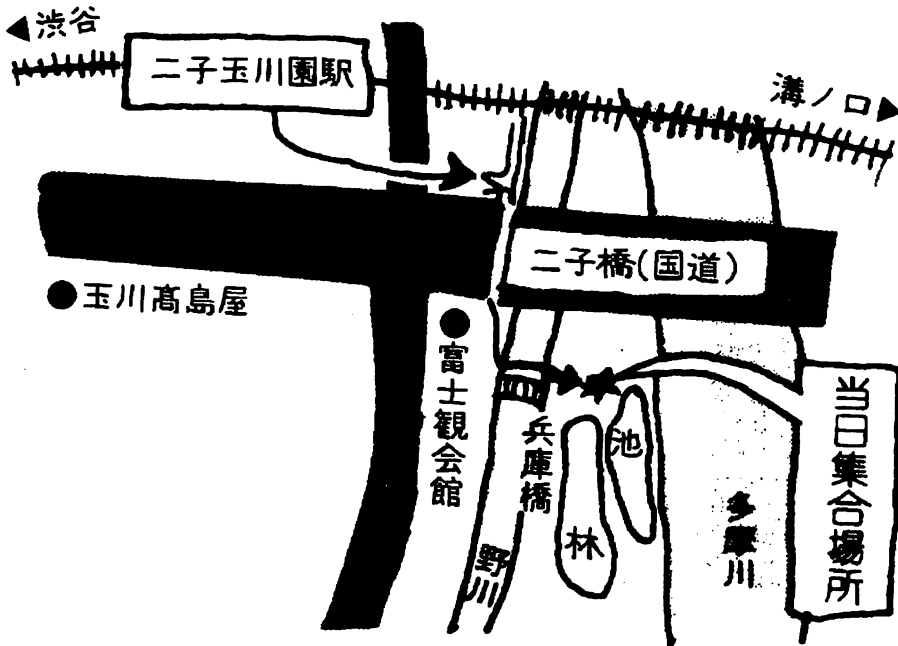
今回の冬期研修会は、世田谷区の外郭団体である(財)せたがやトラスト協会と共同で、12月の第2土曜日に、多摩川・兵庫島河川公園で開催します。バードウォッチングはもちろんのこと、植物なども含めた自然全体をゲーム感覚でウォッチングしますので、全国愛鳥教育研究会会員の方はもちろんのこと、自然に関心のある方ならどなたでも参加できます。あなたも、多摩川に群れるカモやカモメたち、春に備える草木たちなどに会ってみませんか？

## 「イベント要項」

- ◆月 日：平成6年12月10日(土)  
午前9時30分～11時30分まで。
- ◆集合時間：午前9時15分までに集合。  
(受付は午前9時から)
- ◆集合場所：兵庫島河川公園・兵庫橋(公園側)  
(新玉川線「二子玉川園」駅より徒歩5分。案内図を参照。)
- ◆参加費：無料。
- ◆持ち物：筆記用具。
- ※服装・はきものはハイキングぐらいのもの。  
雨具、手袋、暖かい服装も忘れずに！  
双眼鏡・望遠鏡がある人は、持参しましょう。

## 「申し込み方法」

- ◆参加を希望する人は、ハガキに①「ネイチャー&バードウォッチング～入門編～」参加希望と書いて、さらに、②参加者全員の名前 ③参加者全員の年齢・性別 ④代表者の住所と電話番号を書いて、12月7日までに〒158 東京都世田谷区玉川 1-15-1 (財)せたがやトラスト協会ネイチャー&バードウォッチング係まで送ってください。
- ※1. 小雨決行。なお、お申し込みされた方は、当日、直接集合場所にお集まりください。
- ※2. 当日の雨天などによるお問い合わせなどは、(財)せたがやトラスト協会(03-3708-7311・当日は午前8時～9時)までご連絡ください。



論 説

## 愛鳥モデル校の保護活動とは

常務理事 平田 寛重

今回は、昨年行われた野生生物保護実績発表大会を参観した折に頭から離れなかった愛鳥活動と保護活動について考えてみたい。

十年ほど前に全国鳥獣（今では野生生物）保護実績発表大会に参加した時に、いったい何を発表したらいのか悩んだものでした。当時、私の勤務校が愛鳥モデル校の指定を受けていたので、2～3年にわたるそれまでの愛鳥活動を紹介することが精一杯でした。幸い、学校全体で愛鳥教育に取り組んでいたため、まずまずの成績を修めることができました。それでも、野鳥や自然保護に詳しい人を訪ね、何をしたらいいものかと、未熟な活動を効率よく紹介できる発表方法など、相談に乗ってもらったことを思い出します。

当時、今でもあまり変わらないと思いますが、鳥獣保護（当時はこの名称）というイメージと教育活動、そして、愛鳥モデル校の活動とが、どうもしくりこない状況でした。

保護というからには何か目に見えるものでなければならぬのではないかと考え、弱った鳥をむりやり捕まえてきたり、巣立ち直後の雛を誘拐？してきて飼育し、その後、無事、治癒したり育った鳥を朝会などの時間に放鳥するといった盛大な放鳥会を催したり、巣箱をクリスマスツリーの飾りのように1本の木にたくさん掛けたり、1年中餌台に餌を置き、野鳥を餌付けして、てなづけようとしたりといった具合に、野鳥を一種のペットとしてつき合うようなかわり方を保護だと思いこんでしまうことが往々にしてありました。

巣立ち雛をかわいそうだと思って捕まえることがよいことなのかどうか、野鳥にとってどうすることがベターなのかは、自然界における野鳥の生活を知っていれば、当然見えてきます。人の手にかかるような野鳥は、その時点で、野生復帰はほぼ絶望的です。自然界の中では、傷つき、命を落とすものは、他の生き物のエネルギーとなってまたよみがえっていく。それが、自然のしくみです。命は、すべてに与えられた公平な十字架なのです。

また、巣箱を掛けて、鳥がその巣を使って雛をかえすととてもうれしいものですが、反面、人の側の

自己満足で終わりがねない要素があります。何も知らない子どもが、親鳥が入り出す巣箱をのぞいたりいたずらしたりするといったことも起こりえます。

以上のように、ちょっと意地悪く考えてみると、素人が考える保護というのは、ちょっと問題が多いように思われます。根本の原因がわからないままに、表面的に対症療法をしているようなものです。

さて、野生生物保護に名称が変更されから、ホタルやトンボや淡水魚などで保護活動をしている学校が、その実例を発表するようになりました。とても熱心な活動でした。しかし、「小学生が、専門家のような産卵や飼育をしてどうするのだろうか？……」という思いが、その時、頭にこびりつくように残ってしまったのです。というのは、魚やホタルが生息している川や湿地などについての調査や整備はあまり行わず、また、周辺住民へのアピールもあまりせず、ただ人工的に繁殖させて数を増やして放流しているだけのような感じを受けたからです。

保護の本質的な意味は、野生生物が自然の中で一定の規模を保った集団として生存していけるように、人の側が配慮していくことではないかと考えます。その意味では、2羽になってしまった佐渡のトキを「保護する」と言っても、それはもう当初の意味を失ってしまったということです。したがって、単に個体数を増やすというだけにとどまらず、野生生物の繁殖環境や棲息環境を十分に調査し、野生生物の行動や生活などについても研究していかなければなりません。ところが、日本においては、このような分野の研究があまり進んでいないのが現状です。打つ手がないのであれば、思い切ってある程度の綱引きを行い、開発を認めないくらいのことをしておかないと、手段ができたころには、もう保護すべき生物はいなくなってしまうということになりかねません。

このような意味合いから、「保護」ということについて子どもなりにきちんと把握させておく必要性があります。

傷ついた鳥を保護し、治癒させて野生復帰させることも個体レベルの保護活動としては必要なことで



す。しかし、それが保護のすべてではなく、手段の一つにしか過ぎないことを認識しなければなりません。それがなければ、前述したように、「傷ついた鳥探し」「はぐれ雛探し」になってしまう危険性があります。保護は、生態系レベルで考えていかなければ意味はないのです。子どもができる保護への参加については、無理の無い範囲内での活動を考えるべきでしょう。

ここで大切なのは、ふだんから、フィールドで野鳥を観察していくことです。そして、鳥たちにとってどんな環境が必要なのか、現在の環境のどこが不都合なのかを感じとっていくことです。鳥たちの行動から、その暮らしを見ていくことは、鳥にとっても人にとっても大事なことなのです。

日頃の観察を通して、鳥たちにとって明らかに不自然であり、住みにくいような要因があれば、それを除く対策を講じていくのは自然の流れです。例えば、テグスなどの撤去は、河原での環境では、必須のことと言えましょう。最近では、プラスチック粒や鉛弾などによる生物への影響がわかってきています。テグスについては、その因果関係が素人にもわかりやすく、そのため活動としてもとりつきやすいものです。一方、プラスチック粒などについては研究者などの報告や発表があって初めてその因果関係がわかるような、素人にはわかりにくい内容です。このようなことにも対応するためには、普段からの情報の収集が必要になってきます。

また、普段から鳥を見ているフィールドが開発される状況になった時、その自然環境を保護するために、その地域をそのまま残そうという活動を展開することも可能です。神奈川県内のある小・中学校の愛鳥モデル校では、遊水池や水田地帯に生活する鳥を含めた生き物たちを残そうとして成功した例がありました。このような場合、残すことの意味とその必然性を地元の人たちに理解してもらい、その賛同を得ることが大事です。普段の観察や調査の結果から、そこにいる生き物の様子を把握し、そのデータを基にして、残す意味を明らかにし、その必要性と重要性とを市民にアピールして、コンセンサスを得ていくわけです。その土地の有効な活用手段として、テニスコートにするのがいいのか遊水池のままがいいのか？、また、市民の教育施設として、自然教育園のような施設をつくるのがいいのか？はたまた、そのまま手をつけずにおくのがいいのか？といったことについての理解が得られる提案をするには、

日頃から、そのフィールドにおいて、探鳥会や観察会を市民を対象に催したり、PRのためのイベントを人が集まる所で開いたりすることも必要になってきます。

しかし、これは何も、自分たちのフィールドが開発されることになる日のために日頃から調査をしたり探鳥会をしたりするというものではありません。また、何も子どもたちを大人の政治的な話にまで首を突っ込ませようとするでもありません。また、何も直接の保護をするために愛鳥活動をしているわけではありません。あくまでも、自分たちと生き物との距離を短くし、より身近なつき合いができるようにするための活動ですし、鳥が自然が好きだから、鳥を見、自然の中で過ごす時間が増えていくだけのことです。そして、その活動が、仲間や家族、地域の人たちへ鳥や自然への関心を広めていくことになるのは自然の成りゆきのことなのです。愛鳥活動に派手な保護活動は似合いません。普段からの地道な活動の結果として、その地域の保護が形作られ進められていくのが望ましい姿であると考えます。

以前、私の勤務先の学校周辺の観察コースで探鳥会をしていた折、キジバトをぶら下げたハンターに出会ったことがありました。そこは、冬になるとよく散弾銃の薬きょうが落ちていて、みんなで困ったものだと思っていた地域です。その後、銃猟禁止区域の線引きの見直しの際に、校内の代表委員会に提案し、全校の意見がまとまったところで市に要望書を提出したところ、無事銃猟禁止区域になりました。その後は、前述のようなハンターと逢うことはなくなりました。これも、普段からつき合っているフィールドでの問題について、子供たちなりに取り組んで成功した例です。

保護する心も開発する心も、みな人の心の中にあるものです。保護する心の持ち主が多くなれば、それは鳥たちにとってベターなことだと思います。保護する心を持つ人が増えるように、野鳥や自然のおもしろさをみんなに広めていくことが、学校でできるきわめて効果的で実践的な保護活動なのです。

鳥を見ながら自然のしくみを学んでいくことは、鳥が好きだという想いと共に私たちの愛鳥活動を盛り上げていく二つの大きな柱です。そして、鳥が好きだという想い（情熱）と、人を楽しませ納得させる科学的データの両輪で、保護活動は進んでいきます。そして、このことが、地域の自然環境を維持していくのです。

まとめてみますと、普段からの愛鳥活動が保護が必要になった時に役立っているのであって、保護のために愛鳥活動をしているのではありません。もちろん野生生物保護実績大会のために保護活動をするわけでもありません。学校教育の中で鳥を通して自然のしくみを学んでいながら、鳥や自然への想いを盛り上げていき、地域へそれを広めていく活動がメインであって、その結果として、地域の自然環境が維持されることとなります。普段からの地味な活動の継続が、ここ一番の直接の保護を支えていくのです。

## 事務局からのお知らせ

P31でお知らせした通り、冬期研修会を行います。

助せたがやトラスト協会のバードウォッチングは、初心者や一般市民を対象にした1000人規模でのウォッチングです。今回で3回目ですが、これほど大規模のバードウォッチングは、他に例を見ないものでもあり、新聞にも報道されました。

通常のウォッチングでは、指導者が参加者を引き連れて、フィールドを移動していくことが多いのですが、1000人もの規模では、指導者の数を増やしても効果を上げることは難しくなります。

そこで、発想を転換して、指導者は鳥がよく出てくれるフィールドの要所要所に位置を定め、参加者が自主的に移動してくるのを待ちます。そして、指導者もボランティアの方が中心です。

フィールドそのものは、玉川の中州と河川敷という変化に乏しい環境であり、広さもそれほどのものではありません。それでも、カモやカモメの仲間、ゴイサギ、モズなどが見られます。カワセミも出てくれます。

このような条件の中で、見られる鳥を絞り込むことで、識別にあまり自信のないボランティアの方でも、十分に指導することができます。参加者も、指導者の都合でなく、自分の見たいポイントで見たい鳥を好きだけ観察することができます。

このようなユニークなバードウォッチングの様子を、ぜひご覧いただければと思います。

## 編集後記

諸般の事情から、発行が大幅に遅れ、まことに申し訳ありません。ようやくですが、45号をお届けいたします。

本号は、全国各地の実践についての報告がメインの内容です。一口に愛鳥教育と言っても、いろいろな方法が可能ですし、また、現在の状況の中で可能な方法から始めて行かねばならないということもあります。

その意味でも、それぞれの実践が意味を持っているように思います。と同時に、情報交換が大切ではないかと思えます。

(杉田)

### 愛鳥教育 No.45

平成6(1994)年10月31日

発行人	江袋島吉
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒162 東京都新宿区弁天町1番地 三河屋ビル3F (財)日本鳥類保護連盟内
電話	03-3205-7861
FAX	03-3205-7863
会費	3,000円
郵便振替	東京8-12442
印刷所	祐文社

## 愛鳥クイズ

### 【前回の解答】

1. ツバメ・イワツバメ・コシアカツバメ・ショウドウツバメ・リュウキュウツバメの5種。
2. 主に東南アジアのマレーシア・フィリピン・インドネシア・台湾など。
3. もどってくる（愛鳥教育44号の金井副会長の研究例では2割が同じ巣に戻ると報告している）。

### 《参考文献》

- 本若博次「ツバメのなかまたち」, あすなろ書房, 1991  
金井郁夫「ツバメの足環をつけたら」, 愛鳥教育No.44, 全国愛鳥教育研究会, 1994  
日本鳥類標識協会「バンダーニュースNO.2」, 1992  
日本鳥類標識協会「バンダーニュースNO.6」, 1993

### 【今回の問題】

今回は、鳥の名前について、考えてみましょう。

下の1. 2. 3. のグループの中で4種類とも本当にいるグループは何番でしょう。

1. アオアシシギ・アオゲラ・アオサギ・アオジ
2. アカアシシギ・アカゲラ・アカサギ・アカジ
3. クロアシシギ・クロゲラ・クロサギ・クロジ

